



# エチオピアとその周辺の言語に対して 日本人研究者はどう取り組んできたか

## 序にかえて

柘植 洋一

---

エチオピアの諸言語の研究は、17 世紀半ば、エチオピア学の祖と呼ばれる天才的学者ヒーオプ・ルドルフと、エチオピアの事象万端に通じたエチオピア人神父アッバ・ゴルゴリオス（アッバ・グレゴリウス）のローマでの出会いから始まる。その後はエチオピアの鎖国状態の故もあり研究の拡がりは遅々としたものであったが、19 世紀後半からは現地調査をもとに、主にセム系、クシ系言語の研究が進み、周縁部に分布するオモ系、ナイル・サハラ系諸言語の研究も 1960 年代以降、活発に行われてきている。

日本人研究者がエチオピアの言語に関心を何時頃から持つようになったかは分からない。おそらくセム語に関心を持った研究者の中にはゲエズ語やアムハラ語を研究の一環として学んだ者はいただろうが、これらの言語を研究の中心に据えた者はいなかっただろうし、そもそもこうした研究者の数はごく少数であっただろう。

1930 年代、日本国内でエチオピアへの関心が高まるとともに、エチオピアに関する出版物のなかで、アマラ語／アムハリック語（アムハラ語）やガラ語（オロモ語）といった言語が広く話されているという記述が見られるようになった。この時期、日本はアジス・アベバに公使館（のち領事館）を設置したが、そこでアムハラ語についての冊子が編まれたことを紹介しておきたい。これは、『アムハリック語初歩』というタイトルの 45 ページからなる小冊子で、当時の在アジス・アベバ公使館員尾戸書記生の手になるものである。公刊はされず、タイプ印刷で 3 部のみ作成された模様である。内容は 700 語強の語彙と簡単な会話集（7 ページ分）からなり、日本語とそれに対応するアムハラ語がカタカナで記されている。まだ詳しい分析はしていないが、先行する同種の実用目的の語彙集（当時イタリア語や英語で各種出版されていた）をそのまま日本語に直したのではなく、例えば、緒言に「アムハリック語ノ発音ハ頗ル困難ナルモノ多ク日本人ニハ到底発音シ得サル音二十八音アリ」とあるように、おそらくは放出音には苦労しながらも、自分の耳でかなり正確に聞き取っていることが窺われる。

しかし、言語研究面からみればこの仕事は一つのエピソードに止まり、日本の言語研究者の目がエチオピアに向けられるのは、ようやく 1960 年代になってからである。現在に至るもこの流れは大きなものではないが、着実に研究成果が蓄積されてきていると言うことが出来るだろう。

さて本ニュースレターの藤本編集長から JANES フォーラムで言語研究について書かないかとお誘いを

いただいたのは2014年の夏であった。おそらく JANES 関係者のなかには、フィールドで言語学の研究者とは出会うけれど、彼らはいったい何をしているのだろうと訝しく思っておられる向きもあろうし、ご自身言語にも大きな関心をもっておられる編集長自身も同様のお気持ちから声をかけて下さったのかも知れない。有りがたいお誘いであったが、私一人では到底手に負えないので、しばらく他の方々とも相談したうえで、JANES のカバーする領域のなかでもエチオピアとその周辺地域に限定し、執筆スタイルは自由とすれば多くの方々に書いてもらえそうだとの見通しが立ってお引き受けした。フィールドで調査を行ってきた方々に依頼をしたが、その際、執筆スタイルは自由であるが、無味乾燥な業績リストやあまりにも言語学に特化した内容は避けて他分野の方々にも読んでいただけることを念頭に書いていただくようお願いした。また、この企画はエチオピアの言語研究に取り組んできた者にとっては、これまでの道程を振り返るまたとない機会でもあるので、既に他界された私達の先輩の方々についても近い関係のある方に言及していただく事とした。具体的には、石垣幸雄、福井勝義、中野暁雄、鈴木秀夫といった方々である。

ご覧いただくようにそれぞれ書き方も内容もバラバラではあるが、現在の日本人研究者の *status quo* をそれなりに反映しているかと思われるので、統一性の欠如についてはご寛恕いただきたい。個別寄稿分の配列に関しては、およそ、対象とする言語の関係が近いものが隣り合うように配置し、最後に若狭さんによる中野先生のエピソードで締めくくりとした。個々の研究者の活動について更に詳しく知りたいと思われたならば個別にお尋ねいただければ幸甚である。

なお、本企画で取り上げられている言語は、全て西アジアからアフリカ大陸にかけて広く分布する一つの大きなまとまり（(大) 語族またはファイラム）に属する。本文中ではこのまとまりを指して、アフレイジアンまたはアフロ（・）アジアという名称が用いられているが、同じ対象を示すものである。これらの言語の分布、話者人口などの情報については、Ethnologue のサイト <https://www.ethnologue.com/> を参照いただきたい。

最後に藤本編集長、趣旨に賛同して原稿を寄せて下さった言語学研究者の皆さん、厄介なまとめ役を担って下さった若狭さんにお礼を申し上げる。

(つげ・よういち／金沢大学名誉教授)

## ハマル語の研究～古代と現代の接点を求めて～

高橋 洋成

エチオピア南部諸民族州、南オモ県の県都ジンカから車で2時間ほど南に下るとディマカの町がある。結婚年齢に達した男性が牛の背中を渡り歩くというユニークな儀式で知られるハマル族の中心地の1つである。ハマル族が使うハマル語は、同地域に分布しているバンナ語、カロ語、アリ語、ディメ語などと共に南オモ諸語（あるいは東オモ諸語）に分類される。中でもバンナ語、カロ語との関係は非常に近く、ハマル語話者はバンナ語のことを「アリ化したハマル語」だと言う。Lewis et al. (2005) によれば、現在は約47,000人のハマル語話者がいる。

## なぜハマル語なのか

中東のシリアからアラビア半島、そしてエチオピアの一部に広がる言語グループをセム諸語と呼ぶ。さらにエジプト、リビア、チャド、エチオピアなどに分布する（オモ諸語を含む）非セム諸語の多くと、セム諸語とをまとめてアフロ・アジア諸語と呼ぶ。

もともと筆者はセム諸語、とりわけ旧約聖書のヘブライ語やエチオピア古典のゲエズ語といった古代語に関心を持ち、その多様で複雑な「語形変化」に魅せられていた。サピア（1998: 377）が言語を人間の「思考の溝」と表現したように、人間の思考は言語という「かたち」に当てはめなくては外に出すことができない。たとえば、英語話者がある概念を名詞で表現したいとき、それが単数か複数かは伝えたい情報ではなかったとしても、必ずどちらかの範疇を選ばねばならない。それは人間の純粋な思考というより、言語という「かたち」が思考に干渉した結果である。ただし、筆者はここで「言語が人間の思考を規定する」と主張するつもりはない。それよりも、セム諸語の複雑な語形変化がいったい何のために生じ、どのように人間の思考に役立っているのか知りたいと願うものである。

エチオピアはセム諸語地域の最南端に位置し、しかもアフロ・アジア諸語の最南端に近いオモ諸語を抱える国である。「言語の古い特徴は周辺部に残る」という仮説にしたがい（亀井他 1996: 1274-1276）、もしオモ諸語の中にアフロ・アジア諸語の古い特徴と見なしうるものがあれば、古代のセム諸語にも通ずる手がかりになるかもしれない——2006年、柘植洋一先生（金沢大学）を代表とするエチオピア言語調査にお誘いを頂いたとき、当時大学院生だった筆者の目論見はこのようなものだった。古代文献言語を専門としていた筆者にはフィールドワークの経験がほとんどなかったが、当時アジス・アベバ大学の言語学科に在籍していたハマル族のB氏を紹介していただくという幸運にも恵まれた。B氏はディマカ近郊の出身で、ハマルの文化と言語に誇りを持ち、かつご自身も言語学徒ということで、筆者の未熟なインタビュー調査に忍耐強くお答えくださった。

さて、数年に渡る現地調査を経た筆者の感想であるが、ハマル語をはじめとする南オモ諸語は、他のアフロ・アジア諸語とあまりに違いすぎる気がしてならない。実際、最近ではTheilのように、オモ諸語をアフロ・アジア諸語から外し、独立した言語グループと見なす研究者も現れている。とはいえ、筆者は「現代のオモ諸語を通して古代のセム諸語の謎を解き明かす」という目論見を諦めてはいない。今後はオモ諸語とセム諸語とを歴史的なつながりの中で見るというより、オモ諸語そのものが持つ一般性と特殊性に着目していこうと考えている。オモ諸語に見られる言語現象を、人間の言語一般に通じるものと、ある言語または地域の言語群に特有なものとして整理していけば、そのデータはいずれ古代のセム諸語の研究にも、そして一般言語学の発展にも役立つものとなるだろう。

そのようなわけで、以下ではハマル語の代表的特徴をごく簡単に紹介したい。

## かたまりの複数、数えられる複数

英語の名詞は原則として単数か複数かを標示しなければならない。それに比べ、ハマル語は日本語話者にやさしい言語で、「カスキ」（犬）は1匹の犬にも用いられるし、「カスキ・ラマ」（2匹の犬、「ラマ」は



写真1 調査の合間の一休み（左が高橋）  
（2008年2月、ジンカ）

「二」の意味)のようにそのままの形で複数の犬を表すこともできる。また、日本語では「イヌ-タチ」のように接尾辞「タチ」を付けることで複数であることを明示できるが、同じようにハマル語も接尾辞によって複数を明示することができる。ところが、ハマル語の複数の概念には2種類ある。1つは「カスキ-ノ」(犬の群れ)のように集団・かたまりとしての複数であり、もう1つは「カスキ-ナ」(数匹の犬)のように数えられる個々としての複数である(高橋 2012)。

思い起こせば、筆者は中学校の英語の授業で「複数形をとらない集合名詞」に悩まされた。それは英語の遠い先祖が持っていた集合的複数の名残であるが、アフリカの地のハマル語では集合的複数が今も生産的なシステムとして働いており、多様な意味を生み出している。たとえば、「ノコ-ノ」(多くの水)が川や湖の意味になるのに対し、「ノコ-ナ」(数個の水)は水たまりやコップの水といった意味になる。

面白いことに、集合的複数を表す「-ノ」は大きなものを表す場合にも用いられる。たとえば、無数の石ころを表す「セーン-ノ」は文脈によって大きな石、岩の意味にもなる。さらに、これを生物に適用すると女性を表すことにもなる。たとえば、前述の「カスキ-ノ」(犬の群れ)は文脈によって雌犬の意味にもなってしまうのだ。一方、男性や小さなもの、あるいは唯一のものを明示したいときは「-タ」という接尾辞を付ける。「セーン-タ」は小さな石ころを表し、「カスキ-タ」は雄犬の意味になる。



写真2 ハマル族の女の子  
(2008年2月、ディマカ)

表1 接尾辞「-ナ、-ノ、-タ」と数、大きさ、性との対応関係

接尾辞	数	大きさ	性
-ナ	数えられる複数	—	—
-ノ (-トノ)	集合的な複数	大きなもの	女性
-タ	唯一のもの	小さなもの	男性

最近「-タ」の使用頻度が少なくなり、逆に「-ノ」の使用頻度が増えているようであるが、いずれにせよ男性は小さく独りであり、女性は大きく群れをなすのである。

### 主語要素の両脇に居並ぶ動詞

これも日本語話者にはありがたいことであるが、ハマル語の動詞は主語によって形を変えることはない。私が食べようとあなたが食べようと彼が食べようと彼女が食べようと、日本語の「食べた」に対応するのは全部「クンミディ」で済む。

ただし、場合によっては主語要素が義務的に置かれることもある。「これから食べる」あるいは「ちょうど食べている」場合には「クンマ・イ・クンメ」(私が食べる)、「クンマ・キ・クンメ」(彼が食べる)のように、2つの動詞の間に「イ」(私が)や「キ」(彼が)のような短い主語要素を挟み込む。たいていは同じ動詞を繰り返して2つにするのだが、まれに「アルダ・キ・クンメ」(もうすぐ彼が到着して食べる)のように違う動詞を用いるので油断ならない。

このような動詞の使い方は2つの意味で興味をひく。第1に、1つの文の中に2つの動詞が使われるというのは世界の言語の中でも珍しいように思われること。一般に、動詞を主要部とする語の並びのことを動詞句と呼ぶが、この場合の主要部は前の動詞だろうか、後の動詞だろうか。あるいは、どちらか一方が主動詞であり、一方は助動詞(または類するもの)だろうか。実は近年、こうした複雑述語に関する議論

が様々な言語研究者の間で行われており、動詞と動詞の間に主語要素を挟み込むというハマル語の特徴はそうした議論に新たな視座を提供できるかもしれない（高橋 2014）。

第2に、主語によって動詞を変化させる言語も、かつてはハマル語のように主語要素が独立していたかもしれないということ。特にセム諸語の動詞変化は、Lipiński (2001: 367) によれば、かつての主語要素が動詞と融合したものである。しかも、セム諸語には動詞の前に主語要素を付ける接頭辞活用と、動詞の後ろに主語要素を付ける接尾辞活用の両方が存在するのだが、ハマル語の動詞-主語要素-動詞という並びはそのどちらにも派生しうるものである。もちろん、今述べたことは単なる想像にすぎないのであるが、遠い将来にハマル語がどのように変化していくかを様々な可能性にもとづいて想像するのは楽しいものである。

ハマル語に関する先行研究は乏しく、包括的な文法記述と呼べるものは1976年に公刊されたもの1つしかない (Lydall 1976)。その内容は、約40年後に行われた筆者の調査との食い違いも目立つ。エチオピアの交通網が整備され、都市化した若者が多くなるにつれ、ハマル語の「かたち」もまた変わっていくのだろう。

#### 参考文献

- エドワード・サピア (安藤貞雄訳) (1998) 『言語：ことばの研究序説』東京：岩波書店。（原典は Sapir, Edward (1921) *Language: an introduction to the study of speech*. New York: Harcourt, Brace & World Inc.）
- 亀井孝・河野六郎・千野栄一 (編) (1996) 『言語学大辞典 第6巻 (術語編)』東京：三省堂。
- Lewis, M. Paul, Gary F. Simons & Charles D. Fennig (eds.). (2015) *Ethnologue: Languages of the world*, eighteenth edition. online version. <http://www.ethnologue.com/> [2015年8月アクセス] .
- Lipiński, Edward. (2001) *Semitic languages: Outline of a comparative grammar*. Second edition, Leuven: Peeters.
- Lydall, Jean. (1976) Hamar. In: M. Lionel Bender (ed.) *The Non-Semitic languages of Ethiopia*, 393-438. East Lansing: Michigan State University.
- 高橋洋成 (2012) 「ハマル語の数量・程度表現についての覚え書き」 *Studies in Ethiopian Languages* 1: 282-291.
- 高橋洋成 (2014) 「ハマル語のモダリティに関する試論」 *Studies in Ethiopian Languages* 3: 50-70.
- Theil, Rolf. Is Omotic Afroasiatic?: A critical discussion. <http://www.uio.no/studier/emner/hf/iln/LING2110/v07/THEIL%20Is%20Omotic%20Afroasiatic.pdf> [2015年8月アクセス]

(たかはし・よな／筑波大学)

## アはアムハラ語のア、アリ語のア

柘植 洋一

### エチオピアの言語への関心

私のエチオピアの諸言語への関心は、セム語族への比較言語学的関心から始まる。アラビア語やヘブライ語といったセム系諸言語の中でもいわばポピュラーな言語の学習を進めていく中で、エチオピアのセム系諸言語は、セム諸語の中でもいわば辺境に位置すること、また、現代でもいくつもの言語が生き残って

いるという点で、比較言語学的な研究の上で重要な役割を担っているということがわかってきた。そこで、まずは既に死語になってはいるが、二千年にわたる記録を持つゲエズ語の勉強を中心に、アムハラ語の勉強も少しずつ始め、Leslau の文法書に取り組んだが、当時（1960年代末）は、エチオピア人を見つけることも、音声資料の入手も容易ではなかった。そこに、思いがけず、東京外大 AA 研の言語研修という好機が訪れた。

### AA 研の石垣幸雄先生と中野暁雄先生

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所（以下 AA 研とする）は、アジア・アフリカをフィールドにする研究者にとって馴染みの深い研究所であるが、特に、毎年いくつかの言語を対象とする集中的な研修を長年にわたって開催し、多くの研究者がその恩恵に与って来た。私が受講生として参加したのは、1970 年に開催されたアムハラ語と現代ヘブライ語の言語研修である。

現代ヘブライ語の講師は中野暁雄先生であった。アフロ・アジア語族のさまざまな言語について、おそらく世界で最も広くフィールド調査を行い、精力的にさまざまな言語の記述を行った中野先生も当時はまだ 30 代前半であった。詳しいことは若狭さんに譲るが、私自身はこの機会が縁となり、先生の調査データの整理を手伝ったりしてセム系言語の知識を深めることが出来たし、また AA 研の大きな科研のメンバーに入れていただいたお蔭で、当時はなかなか難しかったフィールド調査も 1980 年に初めて行うことができた。その後 1995 年に中野先生がアムハラ語の研修を担当された際には、講読を担当させていただいた。後には自分が代表の科研のメンバーとして加わっていただき、こう言うのもおこがましいが、自分としてはいささかなりとご恩返しが出来たかと思っている。

さて、中野講師の現代ヘブライ語研修を申し込みに行くと、既にもう一つの言語研修が始まっていることを知った。石垣幸雄先生のアムハラ語研修である。幸い中途からの参加を認めていただいたが、他の出席者は全て東京外大の学生であったことが示すように、当時はこうした情報はなかなか入って来ず、あやうく好機を逃すところであった。ヘブライ語研修が夏休みの集中であったのに対し、こちらは毎週土曜日午前の開講であった。私としてはアムハラ語の初級文法を学べると期待していたのだが、そうではなく先生の独自の言語（学）論の話が多く（石垣先生の本来の関心はロマンス語そして類型論にあったと思う）、比較言語学志向の私には馴染めないところが多かったが、それでも大いに刺激されることがあった。石垣先生は日本の言語学者でアムハラ語についての論文を最初に発表された方であり、また類型論的な観点からアムハラ語などのエチオピアの諸言語を扱ったハンドブックを AA 研から出版された。また、ある旅の本の付録レコードに収録されたアムハラ語会話の監修・吹き込みもされた。因みに、このレコードの片面には守野庸雄先生によるスワヒリ語会話も収録されている。

石垣先生は残念なことに 1983 年、52 才で急逝された。

### 初めてのエチオピア調査（1980 年）

先に述べたように、AA 研のプロジェクトに参加させていただき、初めてエチオピアの調査に出かけることが出来たのは 1980 年であった。この数年前からやっとインフォーマントを見つけることが出来アムハラ語の調査を進めていたが、アムハラ語での会話経験はゼロだった。因みに、この留学生ソロモンさんは東大の博士課程で水産の研究をしていたが、後に東京のエチオピアレストラン「クイーン シーバ」のオーナーとして成功をおさめるとは夢にも思わなかった。当時は助手をしていたこともあり、夏休みを挟んで、7月中旬から10月中旬の3ヶ月間の出張となった。書類上はエジプト、エチオピア、南イエメンでの調査であったが、南イエメンは最終的にはビザの問題で行くことが出来なかった。その結果、2週間エ

ジプトで文献の収集を行った以外はエチオピアに滞在することが出来た。

出発前に、その前年までエチオピアの青年海外協力隊（以下 JOCV とする）の駐在員であった JICA（国際協力機構、当時の組織名は国際協力事業団）の田口定則さんとお会いできたので、JOCV には大変お世話になることになった。この時期はレッド・テラーと呼ばれる軍事政権下の厳しい政治状況にあって一度撤退したエチオピアの JOCV が再開して間もなくで、調整員の稲葉泰さんの他には隊員は 6 名と小規模であった。ボレ・ロードのイスラエルガラージュにあった JOCV のオフィスを使う便宜を与えて下さったので、宿としていたラス・ホテルから毎日てくてく歩いて通った。政治的には息苦しい状況ではあったが、この頃はアジスでもまだのんびりした風景があった。合間には隊員の方々と一緒に食事や買い物に出かけ、小旅行に誘っていただく事もあった。

オロモ語、ティグリニア語の語彙や文法調査と並んで、この調査時の主な仕事として、エチオピア人の日常生活、文化についてのトピックを題材に、語りの形で材料を集めた。当初は対話の形で、書き言葉でない、日常語の姿を記録しようとしたが、上手くいかなかったのが、隊員の自主的なアムハラ語勉強会の講師であったブルハヌさんに一応の原稿を作成してもらった上で、それをもとに語ってもらうこととした。しかし、実際には原稿の読み上げとそれへの補足説明という形で、言語資料としては均質でないものになってしまった。そのほかには子ども達の伝統的な遊び歌についての記録なども行った。ただ、これらの歌の歌詞については聞き取りする時間がなく後回しにしたため、結局この時の調査をもとにした AA 研の報告書に収載することはできなかった。

この報告書のアムハラ語は和文タイプを使い、1 文字ずつ活字を拾って打つもので、字間の調整も出来ないものであったが、これは後述の鈴木秀夫先生が日本字研社との協同で開発されたものである。また、この報告書を作成するにあたって、当時はまだ Kane の広汎な辞書が出版されていないため、Leslau や Ганкин の辞書、それに時代を遡るが Guidi や Baeteman の辞書に頼ることとなったが、この作業を通じて各辞書の特徴、たとえば Baeteman は諺を多く載せているので有名であるが、そのほかに衣食住関係の単語が充実していることが初めて分かり有益であった。アムハラ語 - アムハラ語辞書を使ったのもこの時が初めてであった。

## アムハラ語の授業

1982 年に金沢大学に着任以降、言語学コースの「特殊語学」という科目の中で、エチオピアの言語を二三年に一回のペースで取り上げることとなった。アムハラ語中心であったが、ゲエズ語やオロモ語の年もあった。ただ、1 年間の授業なので、初級文法の三分の二程度を扱うのが精一杯で、アムハラ語の言語学的な説明は多くはせず、講義ではなく、語学の授業スタイルであった。同様の授業は幸い、富山大学、新潟大学、名古屋大学、東京大学、山口大学、筑波大学、京都大学などの他大学で実施させてもらえることができた。特に富山大学では 1 年間隔週の授業形態であったため金沢大学と同様の授業を数年間にわたって行うことができた。また、京都大学（大学院アジア・アフリカ地域研究研究科）ではエチオピアをフィールドとする大学院生をはじめモチベーションの高い大学院生が受講者だったので、私にとっても大いに為になった。

## 放送大学講義「外国語への招待 アムハラ語」

1999 年春、放送大学の「外国語への招待」というシリーズの「アムハラ語」の講師としてビデオの収録を行った。エチオピア人講師としては当時東京大学の大学院生だったゲベヨ・アイエレさんがつとめてくれた。あまり打ち合わせを行うことができず、テキストはファックスで数回やりとりをし、最終稿は収録

の日に初めて見るといった具合で、収録もぶっつけ本番に近い形だった。それでもアムハラ語の紹介ビデオが出来たので、そののち大学での講義のイントロダクションに利用させてもらった。自分自身ではテレビでの放映は見ることもなく宣伝もしなかったので、反響も伯母から「洋ちゃんTV見たよ。」という一件があっただけだった。ただ、その後、以前他大学でアムハラ語の講義を受講してくれた方が、東京出張の際にホテルでたまたま見て懐かしかったと報告してくれたのはうれしかった。

### 『アムハラ語入門』

重田先生のご厚意で、京大のアジア・アフリカ地域研究研究科では2001年以来十余年にわたり、アムハラ語（当初は音声学とセット）の集中講義を受け持たせていただいた。自前のテキストを使うほどの時間はなかったので、例文をもとに説明は専ら口頭で行った。しかし、これでは十分に説明を理解してもらえないと感じたので、独習も出来るようなテキストを作り始めたが、作ってもさほど需要もないだろうと思い、最終的な形にはしないままおいた。そのうち京大の西真如さんから『フィールドワーカーのためのアムハラ語入門』というとても良く出来た入門書をいただいた。これがきっかけとなり、あらためてやはり自分スタイルの入門書を出そうという気になり、科研費で『アムハラ語入門』を刊行した。大体週一回通年の授業ではシンタックスについては複文にまではなかなか行けないので、関係節に入ったところまでを区切りとした。このテキストについてもほとんど反響はなかった。その後、この冊子の改訂を含め、続編に取りかかっているが、今しばらく時間がかかりそうである。

### 鈴木秀夫先生のこと

日本語によるアムハラ語入門書の嚆矢は、鈴木秀夫著『エチオピヤ標準語入門』（1974年）であろう。著者は1960年代にハイレセラシエI大学（現在のアジス・アベバ大学）で教鞭を執った著名な地理学者であり、『高地民族の国エチオピア』（1969年）は日本語で書かれたエチオピアについての最も優れた概説書であると私は思っている。特にご自身がクリスチャンであり宗教に深い関心を持っておられたことから、エチオピア正教について多くのページが割かれているのが特徴である。著者の鈴木秀夫先生は私の指導教官柴田武先生と親しかった関係で、私の大学院での発表に際して出席して下さったこともあった。東大のご退官を前に、エチオピア関係の資料をいくらでも持って行って構わないと言って下さったので、お言葉に甘えて段ボール数箱分の資料をいただいた。その中には現地で出版されたアムハラ語の識字教育用のテキストで、同じものが2部ずつあるものが数種類みられたが、その書き込みを見ると、奥様と一緒にアムハラ語を熱心に学習された様子がうかがわれる。その他、1960年代にエチオピアで刊行された雑誌類などの今ではなかなか入手が困難な資料も多いことや、エチオピア正教関係の出版物が多く含まれているのに驚いた。これらは私自身の研究に直接関係するものではないが、散逸を恐れて私自身が一時預かりするつもりでいただいたものである。これらの資料をまとめた形で、それもアクセスが容易な形で受け入れてくれるところに渡すことができればと思っている。

### オモ系言語 アリ語へ

セム系の言語の調査もほんの僅かな部分に手を付けただけであったが、エチオピア・セム諸語とエチオピア（およびその周辺）の他の言語との関わりを明らかにすることに興味が移っていった。そこでクシ系の言語についてはいくつか見てきていたので、全く関わりを持ってこなかったオモ系言語を腰を据えて調べてみなければと思うようになった。エチオピアでのフィールドワークも1980年以降は機会が無く、やっと10年経って、1990年再びAA研の科研に加えていただき、それを実現することが可能となった。

アリ語（アール語 Aari）を対象言語として選んだのは、北オモ諸語よりも南オモ諸語（アリ語、ハマル語、バンナ語、ディメ語）のほうが研究がなされていないことと、アジス・アベバ大学大学院でアリ語を研究していた A 氏と出会い、優れたインフォーマント、ベツレテ・ウレタさん（当時アジス・アベバ大学理学部の学生）を紹介してもらえ、アジスでしばらく調査が出来たことによる。ベツレテさんは言語的直感に優れ、人柄も申し分なかったが、ゴファ語の要素が諸処に混在していることに後に気がつき、結局データとしては注意して扱わなければならないこととなったのは残念である。ベツレテさんとは社会主義体制の崩壊後しばらく連絡が取れず心配したが、その後政府の役人となり、ついには国会議員になった。この科研による調査は 1991 年 3 月までの予定であったが、湾岸戦争の勃発に伴い、残念ながら 2 月半ばで切り上げて帰国せざるをえなかった。この時以来人類学の研究者の方々と知り合い、その後も多くの刺激と援助をいただくことになった。特に、福井勝義先生とは以前から面識があったが、研究会に加えていただいたり、JANES の創設に際してメンバーに加えていただいたりし、様々な形で便宜を図っていただいた。

その後、科研でも小規模な海外調査が可能になり、熊本大学の小脇光男、山口大学の乾秀行両氏とチームを組んで調査を進めることが出来た。幸い代表者の変更はあったもののテーマを変えながら、エチオピア人研究者とも積極的に交流しつつ、更にメンバーを増やして現在まで継続している。当初はエチオピアのクシ・オモ系言語のデータ収集とそのデータベース化に重点をおいたが、その後は社会言語学的な調査、文字化の問題等の動態面での研究や、ドキュメンテーションの一環として、語りのテキストの収集・分析などを主たるテーマとしている。こうした中で Cushitic-Omotc Studies というタイトルで報告書を刊行してきたが、2012 年から名称を新たに Studies in Ethiopian Languages としてオンライン化 (<http://ds22n.cc.yamaguchi-u.ac.jp/~abesha/SEL/>) した。

こうした調査を通じて、専らアリ語の基礎的な語彙・文法データの収集と記述を行うとともに、アリ語の文字化に関わる問題も扱ってきた。しかし、前者については、特定の方言に特化して調査を進めることが出来なかったことが悔やまれるが、これから出来るだけ整理していきたいと考えている。また、上述のように私の研究は比較言語学的関心から出発したものであり、再びそこへ戻りたいとずっと願っていた。アリ語の記述さえ全く不十分なままではあるが、少しそこから離れて、比較言語学的観点からの考察に取り組んでみたいと思っている。

(つげ・よういち)

## 幸運に支えられたエチオピア言語研究

若狭 基道

### 東京でのアムハラ語調査

「一体全体、何故エチオピアの言葉を？」と何故だか屢々訊かれる。困った質問である。他人の遣らない言語を研究したいから、等と答えるのであるが、それなら何故パプアニューギニアや南米や日本の諸方言を選ばなかったのだ、と問い詰められると答に窮する。学部時代にアラビア語を齧ったり故中野暁雄先生

の訾咳に接したりしてアフロアジア諸語への関心を高めていたのは事実であるが、他の言語だって齧っていたし国語学専修課程に在学して訓点資料等にも接していたのだから矢張り答にはなっていない。相性と云うか運命なのであろう。幼い頃から何となくアフリカに惹かれていた気がする。

ともあれ本格的に研究を始めたのは修士課程に入ってからである。学内で探してみたら即座にアムハラ語ネイティブ話者の GA さんが見付かったのは倖いとしか言い様がない。調査への協力も即座に御快諾戴き、指導教官の故湯川恭敏先生に御報告すると「面白いこと出来るよ」との御言葉、洵に幸先の良いスタートであった。

最初はフィールド言語学の定石を踏んで調査票を用いての基礎語彙・基礎文法の調査を試みた。だが、白状すればどちらも中座した。音の聞き取りは正直困難を極めた。言語学の調査に対する資料を提供して欲しいとの此方の身勝手な意図も時として伝わらない。動詞の活用形と目的語接尾代名詞の組み合わせを網羅的に蜿蜒と訊いて行くと GA さんはその時間の掛かる作業に耐えられなくなったのか、「我々も知らない事を訊いてどうする？」との心からの、だが事実としては虚偽と言わざるを得ない悲鳴を上げる。だが、何よりもエチオピア文字を使った辞書や文法書と云う形で「正解」「模範解答」が既に存在しているのが辛かった。仮に基礎調査を成功裡に終えたとしてもそれだけではオリジナルな業績にならないのである。

結局修論は研究の手薄そうな分野を小さく攻める事にした。それなりに上手く行ったが、執筆中に藤本武さんから Leslau の浩瀚な文法書の上梓を教えて戴いた時には感謝すると同時に、先を越されたか、と焦ったものである。

## ウォライタ語との出会い

博士課程進学後の 1997 年、愈々エチオピアでの現地調査を開始した。初回は主としてアジス・アベバに滞在して調査を行った。渡航時点では調査対象言語を決めておらず、調査の進んでいないアフロアジア系統の言語であれば何でも好かった。そして偶々ウォライタ語の話者とチャハ語の話者と知り合えたので、どちらも齧ってみることにした。これはひょっとしたら良くない態度だったのかも知れない。実際どちらの調査も中途半端に終わった。躊躇逡巡の末、ウォライタ語に当面集中すると決めたのは帰国後の事である。チャハ語のインフォーマントを務めて下さった方には申し訳なく、2 回目の渡航ではどの面を提げて行こうかと心苦しかった。「貴方の言語には興味を持ってない」と言わなくてはならない。だが私の再訪前にその方は或る事情により渡米され、孰れにせよ調査は継続出来なくなってしまっていた。これは倖いだったのであろう。

この初めての現地調査は調査票の項目を早く埋めること許りを考えていた嫌いが有り、急いで仕事を仕損じて仕舞った。だから、2 回目、3 回目の調査は事実上、同じ項目の訊き直しであった。だが、ウォライタ語インフォーマントの AK さんの反応は上々である。瑣末に思える例外がポイントになるかも知れない、と妥協せずにとことん私が尋ねて行く過程で、AK さん自身も



写真 1 筆者が初めてウォライタを訪れた 1997 年時点でのウォライタの様子

ウォライタ語の面白さを実感したのであろう、満足そうに「今回の調査は深みがある」。私も博論の骨格が日毎に固まって行くのが分かる。最初からこうすれば良かった、と猛省を促されたのだが、先に全体を粗く掴んでおいたからこそ細部に配慮の行き届いた徹底的な調査に熱中する事も可能だったのかも知れない。ともあれこうして私は、通り一遍の調査では言語研究の醍醐味は味わえない事を悟った。

尚、2回目以降の現地調査であるが、上記アジス・アベバでのAKさんとの調査に加え、順次ウォライタに滞在する比重を増やして行った。ウォライタでの楽しいホテル生活がどのようなものであるかは『フィールドプラス』第9号に秃筆を呵したので御笑覧戴きたいが、少し補足するとあれは少し恰好を付け過ぎた。実際にはもっと緩〜く懶惰な日々である。例えば毎夜折角の発電機による電燈を使って日本から持ち込んだ漫画雑誌を読んでいたりする。帰国に際しては「記念品」と称して友人に進呈して来るのだが、本当に後生大事に取ってある人が居ると後年分ると態々その古雑誌を借り出して懐かしい想いに浸りながら読み耽っていたりするのだから、何しに行っているのか、と云う感じである。

### アジス・アベバでの濃密な共同ホテル生活

アジス・アベバではレストランも併設されていない安宿(とは言え麦酒位はあるし頼めば大抵の物は買って来てくれる)に泊まっていたが、善良な従業員に恵まれ楽しい日々であった。特に2000年はウォライタに行く前後併せて3ヶ月間、住み込みで勤務する彼等と共同生活だったので忘れられない。彼等の作った食事をしょっちゅう一緒に食べさせて貰ったし、洗濯も無料でしてくれた。甘えっ放しでは悪いので私も支払いの度にお釣りはチップとして渡し、祭日には奮発して鶏を丸一匹贈った。ある時は私がパンを買いに行かせたと口裏を合わせて欲しいと言う。訳が分からない。訊くと、抜き打ちで支配人が来たのにある従業員が偶々サボって不在だったので激怒しているとのこと。咄嗟に「モトミチがパンを買って来いと言ったから」と言い訳したらしい。私も支配人を上手く言い包め、序でに彼等を絶賛し昇給を勧めておいた。尚、翌日、支配人がパンを山程差し入れてくれ、皆で食べたのは勿論である。

最近アジス・アベバに滞在する期間自体が短いので嘗ての様な濃密な共同生活は望むべくもない。従業員も交代したし世相も変わったらしい。私自身も加齢と共に詰まらない一宿泊客に墮したのだとしたら、何とも寂しい。

この宿を紹介してくれたのはこの宿の正面に住むマムフル・テスファイエである。マムフル(先生、師)と云う称号からも分かる様にエチオピア正教の指導者である。マムフルが毎早朝に行うタバル(聖水)の儀式こそ殆どサボっていたが、私は毎晩マムフル宅に御邪魔して夕食の御相伴に与っていた。頑固な処もあるので正直辟易した事もあったが、色々助言して戴いた。週末には車で彼方此方連れて行って貰った。私がウォライタに行く時は荷物を預かって貰ったし、緊急連絡先にもなって戴いた。私に対してだけではなく、人を持て成すのが大好きな人だった。俗世間の人間としては大金持ちで、困っている人を金の力で助けるのが大好きな人だった。私はマムフルから現世の人間として大切な事を多く学んだ。私が口を開く度に「金(カネ)が欲しい、何よりも金が欲しい」と言って憚らないのはマムフルの様に



写真2 筆者がアジス・アベバで泊まっているホテルの入り口が道の右側中央に見える。右側手前は学校、左側はマムフル・テスファイエの家。

金を遣って他人に喜んで欲しいからである。

### ウォライタ語の魅力

一体ウォライタ語の何処がそんなに面白いのか、具体例は枚挙に遑が無い。その詳細は、このようなエッセーでは一切割愛し、博論を初めとする拙稿に譲りたいのだが、編集長の奨めもあるので、以下で若干紹介することにする。尤もこの面白さを遍く共有して貰えると思うのは思い上がりであろう。実際、私の大学の授業評価アンケートでもウォライタ語を扱った授業のみ極端に評価が低く、自由記述欄も罵詈雑言の嵐である。本稿読者諸賢にも、本稿をエッセイとして愉しむ為には、以下、本節を是非ともすっ飛ばされたい。

まずは普通名詞の活用体系の研究がある。ウォライタ語は日本語と異なり、普通名詞も複雑な活用をする。取分け厄介なのが先行研究で「限定・非限定」と言われていた対立である。そんなヨーロッパ的な概念では説明出来ないものであり、具体的な指示物を想定する（し得る）か否かの対立であると説いた。名詞らしい使われ方をする時の形と形容詞らしい使われ方をする時の形がそれぞれある、と考えても、まあ良い。こう考えることで様々な謎も解けるのだが、呼び掛けに使う形にまで具体的な指示物を想定しない形がある、と言い張るのは少々無茶かも知れない、活用表を綺麗に揃えようとする事自体が間違っているのかも知れない、と最近では考えている。

次に、人名の調査がある。注意すべきは、歴史言語学的に、理論言語学的に興味深いから調査をしている、と云う点である。ウォライタでは邪視信仰に絡んで敢えて汚い名前を付けたりする、杯と話すときアフリカに全く興味のない人でも「へえ」と位は言ってくれるが、ウォライタ語人名研究の本当の面白さはそんな処にあるのではない。女性人名は活用もアクセントも1パターンしかないのに、男性人名は活用の型に応じてアクセントのパターンも変わる、だとか、人名が全体として普通名詞の具体的な指示物を想定しない形に似ている、だとか、そうした形態論に関する問題とその謎解きこそが面白いのである。

私は文字論に大いに関心があり、ウォライタ語を題材に研究して来たが、アフリカ諸語のフィールドワーカーとしては珍しい方かも知れない。これまた強調したい点は、正書法の制定だとか、況してローマ字による音素表記の普及に貢献する気は私には毛頭ない、ということである。純粹に彼等の文字使用を観察し、そこで何が起きているのか知りたいだけなのである。記述言語学者としては当たり前の態度だと思っているし、ウォライタの社会を考慮するとウォライタ語を書く必要性が果たしてあるのか、と云う根源的な問に辿り着くのだが、今時この様な考え方をしていると研究成果を現地に還元しない困った研究者と見做されても仕方ないのかも知れない。

ひょんな事からウォライタポップスを紹介する機会にも恵まれた。音楽の専門家でなく、言語学徒の端くれとしてはその歌詞に見られる詩的機能、簡単に言うとウォライタ語だからこそ出来る、他の言語に翻訳出来ない側面に着目したのだが、煎じ詰めれば「ウォライタ語を知らなければ愉しめない」と云う結論なのだから、ウォライタポップスをブームにすることは叶わなかった。勿論、翻訳可能なウォライタポップスも多く、今後はそうした歌が増えるのかも知れないが、そうなったら少なくとも私にとっては皮肉にも研究対象としての面白さは減じる気がする。因みに詩的機能を追い求めると文学に行き着くのは当然である。私が最近、ウォライタの謎々の蒐集に嵌っているのも宜なる哉、である。

文の構造に関しては、ウォライタ語は引用が滅法面白い。大抵の場合に直接話法と間接話法が混じるのである。例えば「君とは、私は働かない」と言われた人が悄気て帰って来て他人に報告する場合、「彼は、私とは、私は働かない、と言った」と言えるのである。又、どの言語でも引用部は文の他の構成要素とは異質な要素であるからには通常の節を構成しない可能性があり、事実ウォライタ語の場合、代名詞の使い

分けがその傍証となるのだが、推敲に推敲を重ねた整った文のみを相手にする伝統文法から大きく掛け離れたこの結論は到る処で拒絶反応に遭っているのが現実である。これだけ反対があるからには、私の方が莫迦だったのであろう。

こうして見ると、色々研究して来たものだ。その成果の大半は鼻屑目に見ても陽の目を見ておらず、その点では私の研究は不幸なのかも知れない。だがそれはレベルの低い研究総てに通じる事であろう。1つ1つ丹念にデータを集め、繯れを解して行く作業の過程で私は慥かに満足を感じていた。なのに文句を言っではなるまい。

## 博士論文の完成とその後

扱、通り一遍では駄目だ、徹底的に調べなければ駄目だ、との立場で私は研究して来たのだが、そうした研究態度で良かったのかどうかは実は分からない。実際、博論提出は、私が少なからぬ時間アルコールに依存していた事とも相俟って遅れに遅れた。ウォライタ語の全体を扱っている上に、掛けた時間相応の分量はあるのでコピー代や製本代が嵩んだが、相応の儲けは無かった。だが研究を志す若い人達に、薄っぺらいもので構わないから早く書け、とは言いたくない気もする。私に指導を仰いでいる学生がいないのはこれまた倖いとしか言い様がない。

博論の完成は私の研究生活にとって大きな一区切りであったが、その後も現在に至るまで、ウォライタ語の調査を継続している。だが博論完成後、アジス・アベバのAK氏も、ウォライタの町でインフォーマントを務めて下さったAG氏も忙しくなってしまう、今迄の様に多くの時間を私と過ごす事が難しくなった。別のウォライタ語話者を探す手もあるが、何となくそんな気になれなかった。そこでウォライタの町にも色々な言語の話者がいることを利用し、並行的に他の言語の、具体的にはカンバタ語の調査を始めた。これがまたウォライタ語の研究にも役立つ、更に言えば必要であるとの予測の下にでもある。

ただ、恥ずかしながらどちらの調査も目下停滞している。言い訳には事欠かないが、何と行っても現地調査に行っていないのが大きい。非常勤の授業の関係で長期の休みは取れない。どうせ行くならもっと調査票を充実させてから、等と正論をほざいている内にずるずると行かなくなってしまう。個人の科研費は勿論、2015年度からは科研に応募する資格すら失った（その後、再び資格は復活した）。そうこうしている内にマムフルの訃報も届いた。

だが、健康面で自信のなくなった現時点で調査費が潤沢にあたりしたら却って困る。3年以上に亘るこの日本引き籠り期間に死蔵されていたデータを聊かなりとも活用して成果を公にする事も出来た。そして何よりもフィールドに行きたい気持ちを改めて確認出来た。こう考えると、例えば博論提出前ではなくこのタイミングで調査に行けなくなった私は全く以て運が良いと言わざるを得ない。

私は嘗てアフロアジア言語学に革命を起こす覚悟で研究を始めた。己が菲才が明らかとなり、生活に追われている現在、悲しい哉、そんな妄言は吐かなくなった。私も少しは賢くなったのだろう。だが、せめてオモ言語学革命なら、ウォライタ語学革命なら可能かも知れない。そう、それこそがアフロアジア言語学革命の第一歩である、と矢張り大きな事を言いつつ、緻密な現地調査を今後共続けて行く意志を表明して筆を擱きたい。

(わかさ・もとみち／明星大学非常勤講師、跡見学園女子大学兼任講師、白鷗大学非常勤講師)

## 私の言語研究～エチオピアでの出会いと別れ～

乾 秀行

### オロモ語との出会い

私が最初にエチオピアに行ったのは、1992年の夏でした。

言語音の中には通常の肺からの呼気を使って発音する音以外に、喉頭を使って発音する音があります。音声学では放出音と呼ばれる音で、教科書にはコルクの栓を抜く時の音と説明されています。身近な言語にはそのような言語音はなく、類型論的に世界言語の音の体系を調べている時にこの音にとっても興味を覚え、実際に耳にしたくなったことがエチオピアでのフィールドワークの始まりでした。

その時は社会主義政権崩壊直後で政情がきわめて不安定な時で、首都アジス・アベバでも衝突があつて多くの逮捕者が出て緊迫していたため、車で地方に行くことなどできず、アジス・アベバのホテルで2週間過ごしました。その時ホテルのレストランでオロモ人が話しかけてきたのが最初の対象言語としてのオロモ語との出会いです。彼は日本で二年間生活したことがあり、その時の経験を片言の日本語を交えながら話してくれました。次の日から彼の友人であるオロモ人が次々にホテルにやってくる、最終的には5人ぐらいの集団で食事をしながら語彙調査をしました。オロモ語には喉頭を使う音が放出音以外にもう一つあり、入破音と呼ばれている音で「飲む」という単語に出てきます。ドリンクを飲みながら発音の仕方を教えてくれるのですが、なかなか合格点をもらえませんでした。その時その中のひとりが親族名称の語彙の話になったときに、突然「祖母」という単語が入った悲しい旋律の歌を悦に入つて歌い出したことが今も鮮明に記憶に残っています。彼らはアジス・アベバ大学の学生だったのですが、その学生は大学構内での衝突で逮捕された経験があるとこっそり教えてくれました。次にエチオピアを訪れたときには彼らにはもう会えず、最初に話しかけてきた学生はフィリピン、歌を歌っていた学生はアメリカに渡つたと聞いています。その後もこういった一期一会の出会いがエチオピアではとても多く、次に会える保証はありませんでした。今は携帯電話が普及し、メールアドレスの交換も可能となり、そういうことは少なくなりました。

音声学的な興味からスタートしたフィールドワークでしたが、単語や挨拶のことば、簡単な文を聞き取っていくうちに、フィールドワークの世界にはまりました。オロモ語は動詞の複合時制が複雑で、たとえば動詞の不定形に英語のbe動詞に当たるjiraという形をつけると、ちょうど日本語の「テイル」をつけるのと同じような機能を果たします。前に来る動詞の種類によって、jiraが付けられたり付けられなかったりするのですが、アサツラという町に2ヶ月ぐらい滞在したときは、一日中その形ばかりをしつこく聞き出そうとするので、インフォーマントになってくれたジャーナリストの男性に、「またjiraの話か」と呆れられました。90年代はオロモ人の民



写真1 アサツラで出会ったオロモ人ジャーナリスト

族活動が制限されていた頃で、民族高揚の過激な記事を書いたオロモ語の新聞が突然発刊停止になったりしたため、人目を気にしながらの調査でした。彼の取材にも同行させていただきました。農協のような所に行って、たとえば作物の出来具合について取材するわけです。その記事が新聞に載ると得意げに「面白いだろ」と自慢してみせてくれるのですが、他愛もない地方ニュースが面白いわけがないので、正直に「どこが面白い？」と質問すると、彼も自覚しているようで、悲しそうな顔をしていました。彼はアジス・アベバ大学の社会学の修士を出た人で、大学に戻って博士を取る計画を立てていました。その時は一緒に少数言語の村に行って調査しようと話をしていましたが、残念ながら、その数年後に病気で急逝してしまいました。とてもいい男でした。

### 少数言語調査～バスケット語～

2000年頃から、柘植先生が中心で始まった南西部で話されている少数言語の調査に参加しました。調査地としてアルバ・ミンチを拠点に活動を始めました。最初はとにかく少数言語話者を探すということで、街中を聞き回るのでありますが、金目当ての怪しい輩に付きまとわれたり、4言語を自由に操ると称する男に騙されて無駄に時間を潰したり、なかなかお目当ての少数言語話者は見つかりません。アルバ・ミンチの近くにガンダという少数言語があると教えられ、「キルブノ（近いよ）」と言われて案内者に連れられて歩き出したら、とんでもない距離で、炎天下を3時間ぐらい歩かされた時にはもうくたくたで調査どころではありませんでした。アルバ・ミンチまでの帰り道はもう歩けず、道端にへたり込んでいると、横を大きな荷物を背中に背負った女の子の集団がおいしそうにサトウキビをかじりながら追い越していきました。ひ弱なファランジ（外国人）の姿は逞しい彼女たちには滑稽だったらしく、思いっきり笑われました。たまたま通りかかったトラックの荷台に飛び乗り、無事ホテルにたどり着いた時は服が泥だらけで、清掃のおばさんにこれまた大笑いされました。

その時苦勞して最後に出会ったのが、現在主に研究しているバスケット語のインフォーマントのフィクレです。その後10年以上彼との付き合いが続いているのですが、毎年1ヶ月程度アルバ・ミンチと彼の生まれ故郷であるバスケットの村に行くことが恒例行事となりました。バスケットに行くには、ソッドからサウラまで車で3時間走って、それから山道に入ります。途中谷底に落ちるのではないかという断崖絶壁の横を通り過ぎるときには、高所恐怖症の私はいつも手が汗で滲みます。村にはホテルがないのでテント生活なのですが、そこで問題なのが、蚤・ダニからの攻撃です。油断して腰掛けていると、あっという間に身体中刺されてしまい、かゆくて調査どころではなくなります。日本から持ってきたペット用の防虫剤を身体中にスプレーし、全身タイツで肌を守り、慎重に調査をすることになります。虫に刺されるか刺されないかは体質によるようですが、私は全く駄目なタイプで、毎回虫対策がフィールドワークの要となります。

少数言語は文字がないので、もちろん辞書も教科書もありません。しかしバスケットの小学校ではバスケット語の授業が始まりました。赴任してきた先生たちはどう教えたらいいか、みな苦勞しています。SIL（夏期言語研究所）が2008年にバスケットの高校の先生と共同で試験的に教科書を作ったのですが、文字がアムハラ文字表記になっています。バスケット語を表記するために、長母音記号や重子音記号が新たに考案され、アムハラ文字にはない入破音やhの有声



写真2 左がバスケット語インフォーマントのフィクレ氏

音には、アムハラ文字を改変した文字が作られていました。しかしそのような正書法はアムハラ語学習中の小学生を無駄に混乱させる元になるので、決して教育用にすぐれた教科書ではありません。そこで2011年から母語話者のための教科書作りに着手し、小学校の先生に相談し、インフォーマントのフィクレと試行錯誤を繰り返しながらローマ字表記による正書法を考えました。2014年に絵付きの教科書が完成し、バスケットにある小学校に配布してきました。今後も改良していくつもりですが、実際に使ってくれるか楽しみです。研究成果を彼らに還元できることが言語学者としての大切な仕事の一つであると思っています。

## さらに南へ

バスケット語は系統的にはオモ系に属しているのですが、現在数万人の話し手を持ち、すぐさま消滅の危機にある言語ではありません。しかしエチオピアにはバスケット語よりももっと話し手の数が少ない言語がたくさんあり、それらはまだ十分な研究がされていません。最近もガンベラ近郊で新たな言語が見つかったそうです。そのような言語の記述はできるだけ早く行わないと、近隣の有力言語に言語交替をする可能性があります。つまり少数言語が次世代に引き継がれなくなってしまいます。2、3年前からニャンガトム近郊のナイル・サハラ系やクシ系の少数言語の記述調査を始めました。こちらは極暑地域なので、今までの言語調査とはまた違った困難さを伴います。また交通手段がさらに限られ、エチオピア人運転手でもどこが道なのかわからないような道を走り、ワニが生息する川は木をくり抜いたローカルボートで恐る恐る渡り、野生動物が棲むジャングルの中を急ぎ足で移動することになります。しかしその先には村があり、少数言語が生き生きと話されています。古い生活形態が奇跡的に残っています。

現在は、アジス・アベバ大学の先生たちと共同で、そういった少数言語のドキュメントを作る研究を始められています。この調査ではビデオカメラで生の話しことばを録音することが基本で、それを文字化して文法解釈するという作業です。通常の記事調査では言語データを収集する際にこちらの意図した文を言ってもらうので、最初から聞き取った文の意味は自明です。ところが、会話の場合、一つ一つの文が何を言っているのか文字にして理解することから始まります。何度も何度も聞き直すことになります。他動詞文であれば通常主語と目的語がありますが、日本語と同じように、会話の中では言わなくてもわかっている要素（言語学的には背景化されたトピック）はどんどん省略される方が自然です。逆に、会話を成立させるための様々な文法要素が加わります。日本語で言えば、「だよね」や「じゃん」みたいなニュアンスに当たることばがたくさん出てきます。こういった話し手の文に対する判断に関わる要素のことを言語学ではモダリティと呼びますが、どの言語も同じでしょうが、非常にたくさんの形態があり、それぞれの機能を明確に説明することが難しい場合も多々あります。しかしそれらは会話を成立させる上で最も重要でかつ人間的な部分であり、その解明が言語研究にとって実は一番面白いのかもしれない。

言語学は極端な話、言語データさえあれば成り立つ学問です。しかし、言語は話し手がいてこそ生命を宿します。現地の人と関わりながら、時には大喧嘩をし、時には危険な目に遭いながら、言語データを集めるこの研究スタイルが私には合っているようです。

ボートでしか渡れなかったニャンガトムのオモ川に、最近ついに鉄製の立派な橋がかかったそうです。サトウキビのプランテーションのためだそうですが、彼らの生活環境も大きく変わるでしょうし、言語交替が一気に進む可能性もあります。変わってしまう前に言語調査を急がなければなりません。

(いぬい・ひでゆき／山口大学)

# フィールドワークを体験して

小脇 光男

---

## エチオピアと出会うまで

学部、大学院では中東の言語やメソポタミアの古代語を少しずつ齧った。留学先のイスラエルでは、言語学系の学生は、東、西、南のセム語から少なくとも一つずつ学ぶべしという指導教員の方針のもと、いくつかクラスを巡り歩いてみた。その中にゲエズ語（古典のエチオピア語）があり、週2回、2年間学んだ。もっとも最初の年はヘブライ語での授業についていけず、2年目は再履修であったが。紙の上とはいえ、これがエチオピアとの最初の出会いと言えれば出会いであった。1970年代の後半、エルサレムではエチオピア人の集団をよく見かけたけれども、なぜ彼らがここにいるのか、エチオピアとはどんな国なのか、といった歴史や現実にはほとんど興味も関心ももっていなかったし、後にエチオピアに関わることになるとは夢にも思っていなかった。

## フィールドワークの切っ掛け

もう随分前のことになるが、金沢で柘植先生と一杯やりながらエチオピアのお話を伺っているうちに、何か共同研究を、ということになった。私自身そのような話題はもう忘れてしまっていたところに後日、エチオピアの少数民族の言語調査というテーマで科研を申請するので、参加するよという連絡をいただいた。フィールドワークの経験も研究の蓄積もなく、記述言語学の実地訓練すらも正式に受けたことがない者が、このような学術的な調査、研究に参加してもよいものかと躊躇した。一度ちょっと行ってみるといふ気持ちで参加すればよいからというお誘いに乗って、とりあえず名前を加えていただいた。

2001年度にこの科研は採択され、以降も柘植先生、乾先生のご尽力により、若い研究者のメンバーも加わって、このプロジェクトは今日まで継続している。私はといえば、途中下車するわけにもいなくなり、ほぼ毎年、乾季の時期にエチオピアを訪問することが年中行事の一つとなって、とうとうズルズルと今日に至っている。

## 初めてのエチオピア行きとコンソ語との出会い

第1回目（2001年）は、初めてのエチオピアということもあって、柘植先生とご一緒させていただき、アジス・アベバ大学エチオピア学研究所（IES）での手続きの方法やエチオピアの言語状況をはじめ、エチオピアの諸事情などを教えていただいた。余談だが、出発の数日前に持病の尿路結石が発症し、痛みと血尿に苦しみながらの出発、幸い機上で石が排出されたことが思い出される。

エチオピアの言語調査の現状についてはまったく予備知識はなく、こんな中でどんな言語を選んで調査すべきなのか見当もつかなかった。IESや言語学科の先生方にもアドバイスをいただいた。しかし、たいしては現地に行きつくまでに時間も体力も消耗してしまうであろうところで使われている言語だった。いきなり遠方に出かけるのは無理だと感じ、とりあえずアジス・アベバ市内でなんとかインフォーマントを見つけて調査し、後日現地に出かけてみるという省エネ方法はないものかと思案した。そこで翌2002年は、言語地図などの資料を片手に大学のキャンパスに居座り、そこいらを歩いている学生に声をかけて情報収

集すること数日、インフォーマントとして英文科で学ぶコンソ（Konso）出身の青年、A氏を紹介してもらうことができた。初めから調査対象としていた言語ではなかったが、これがコンソ語を調査する偶然の切っ掛けであった。

A氏にコンソという地域やコンソ語の諸事情を尋ねながら、取り敢えず基礎語彙と音声の調査に取り組んだ。この時の記録は mini disk 12 枚に残っているが、なんとも未熟な調査内容で赤面してしまう。A氏は以前にもインフォーマントの経験があり、また英語の専攻であったこともあって語感は鋭く、こちらの尋ねること以外には余分な情報は語らず、優れたインフォーマントだった。しかし、残念ながら、彼はオランダ留学を控えており、これが彼をインフォーマントとする最初で最後の調査となった。代替りのインフォーマントとして、コンソ族は南部地域を中心にあちこちにコミュニティーを作っているのだから、出かけてみるようにとのアドバイスをもらった。

### コンソ語とは？

ところで、この時はコンソ語がエチオピアの諸言語の中で、言語学上どのように位置づけられているかなど、詳細はほとんど知らないままだった。帰国後に調べてみたところ、言語学の百科全書と言われる『言語学大辞典』（三省堂）には独立の見出し語として「コンソ語」の記載はなかった。この言語に関する報告、論文の類も漁ってみたが、概略を知ることのできるような記述文法は見当たらなかった。逆に言えば、予備知識に惑わされないですんでいるのかもしれない。

なお、コンソはアジス・アベバからやや南西寄りに約 600km 下ったところにあり、中心部はカラティ（Karati）と呼ばれている。コンソ族の集落はカラティ周辺の山の上であり、いくつかの村落に分散している。コンソ語（カラティ語とも）はアフロ・アジア語族中のクシ諸語（Lowland East Cushitic）に属し、オロモ語などと近い関係にある。母語話者人口は 20 万～30 万と、資料により相当に幅がある。コンソ族は商売に従事する人が多く、その言語はコンソの地域を越えて、特に南部では通商語として使われているようである。コンソ地域内外には方言がいくつかある。アルバ・ミンチ（Arba Minch）、ジンカ（Jinka）など南部の町には、コンソ族のコミュニティーが散見されることを確認している（一説によれば当局による強制移住とも）。

### コンソでの調査、そしてインフォーマントについての悩み

A氏の後には良いインフォーマントに出会うことができず、調査にはしばらく目立った進展はなかった。この間の事情は省略するが、インフォーマントが母語としてのコンソ語を使いこなせない、A氏とは出身地域が異なっているなどの事情が重なり、初回に収集したデータはほとんど役に立たなかった。

2005年と2006年の比較的まとまった期間、コンソで調査する機会を得た。現地では教会関係の若いK氏がインフォーマントになってくれた。新約聖書のコンソ語訳（2003版）、コンソ語で書かれた初等教育用の算数、民話、地理、保健などの教材を紹介してもらった。たいていはアムハラ文字で表記されており、ごく一部がラテン文字で表記されていた。コンソ語のあらましを掴むのには有用な資料と思い、部



写真1 コンソの村で織物をする老人（2005/3/5）

分的に音読、録音してもらおうとともに、一語一語説明してもらった。アムハラ文字で記されたコンソ語を自分で音読しながら文法分析を試みるのは、正書法も特に定まっていらないようなので、かなりの苦勞であった。

ところで、この K 氏も基礎語彙や動詞の活用を尋ねる段になるとかなり怪しく、自分でもそれと認識したのか、自分よりもコンソ語をよく知っているという友人を一人連れてきた。二人の意見はしばしば食い違い、調査ノートは読み取り不能となってしまうのだが、基礎語彙、動詞の基礎的な活用などを、今後の訂正、修正の可能性を多分に含みつつも、とにもかくにもまとめることはできた。

ついでながら調査の合間に、学校教育でのコンソ語使用について High School（生徒の年齢から初等～中等教育レベルと思われる）の教員に聞き取りを行った。校内に入ると、ここにも英語教育の波が押し寄せており、「英会話力向上のため週に一回、教員も生徒も英語を話す日」「金曜日は英語を使う日」などのポスターが貼ってあった。参観を許可された英語クラスは、100 人位の生徒が教室を埋め尽くしていた。教科書はなく、生徒は教師の板書をひたすらノートに書き写していた。教員は国内の各地から赴任してくるためか、授業はアムハラ語で行われていた。校長に学校教育におけるコンソ語の使用やコンソ語の文字化の可能性について尋ねてみたが、あまり関心をもっていないようであった。



写真 2 チャガを飲んでみる (2006/3/2)

### 新しいインフォーマント

2007 年、最初のインフォーマントであった A 氏がオランダ留学を経て、アルバ・ミンチ大学の教員になっていることを知り、同地で再会することができた。その折、同地の High School 教員の中にインフォーマントとして適任者がいるからということで、カラティ出身の社会科教師、G 氏（当時 45 歳）を紹介された。彼はインフォーマントの経験はなかったけれども、常に的確に答えてくれ、なによりも熱心に、辛抱強く調査に付き合ってくれた。G 氏の協力を得た 5 回にわたる調査は最も安定したデータが得られた時期であり、これまでのデータを点検、修正することもできた。また、調査の合間に、多方面にわたる彼の博学な知識に耳を傾けることも楽しい一時であった。

### 別の言語に挑戦してみたが…

その後、突然 G 氏と連絡がとれなくなったのを機に、コンソ語の調査には、まだ満足できる結果を得たわけではなかったのだが、一応の区切りをつけ、エチオピア・セム語にも触れてみたいと思った。アジス・アベバに近い地域ならブタジラ (Butajira、いわゆるグラゲ・ゾーン Gurage Zone に位置する) で話されているドビ語 (Dobi, Dubi) がよいとのアドバイスがあったので、早速インフォーマントの青年を紹介してもらった。しかし、ここでまたインフォーマントの問題に悩まされることになった。肝心のドビ語については、しばしば忘れていたり知らなかったりという有様であり、調査の最中に携帯で頻繁に親兄弟に確認するため、時間をかけた割に有益と言えるようなデータは集まらなかった。この調査の途中、同じインフォーマントから、ドビ語はともかく、この言語を調べてみないかとの提案があった。それはムエット (Muet) と呼ばれる言語で、ドビの女性の間で、しかも特別な祭りの時だけ口にされる言語だという。その

真偽のほどはわからないが、アジス・アベバ大学に関心を持っている研究者がいるようである。また、この祭りについて自分の姉が卒論を書いているということで、そのコピーを見せてくれた。いくつかの単語が記されていたので、一応メモさせてもらったものの、それきりになっている。

### おわりに

振り返ってみると、良いインフォーマントとの出会いが調査の進捗にいかに重要なことかを実感する。2000 語程度の基礎語彙とそれらの用法を収集するだけでも多大な時間を費やしてしまった。

2013 年春に退職してからはフィールドに赴く機会も逸しているし、体力的にももうその機会はないかもしれない。記録ノートや収集した資料は、前任校の研究室を去る時、段ボール箱に無秩序に詰め込んだままになっている。今後の展望は漠としたものであるが、少し落ち着いたら未整理のデータをまとめたいと思っている。

(こわき・みつお／熊本大学名誉教授、京都産業大学)

## 現代エチオピアと古代エジプトを繋ぐロマン

吉野 宏志

### はじめに

現在はエチオピアでの現地調査を基に大学院で言語学の研究を行っているが、元々私が志望していたのはエジプト学者だった。古代エジプト文明の様々な側面を対象とする研究者をエジプト学者と呼ぶことができるだろう。私は特に古代エジプトの文字や言葉に魅了されていたが、語学や文献学で問題となる「言葉の意味や使われ方」よりも、「構造や体系」の方に大きな関心があった。高校卒業後にリヴァプール大学（イギリス）のエジプト学科へ入学し、著名な古代エジプト語研究者の一人である Mark A. Collier 上級講師（現教授）に師事した後、広くアフロアジア語族を対象とする言語学の道へ進むため、セム語学の伝統を有する筑波大学大学院の一般言語学研究室へ進学した。執筆時現在、池田潤教授の下でアッレ語（‘Ale）の動詞形態統語論を中心とした調査研究を進めている。本稿では、アッレ語研究の現在、ガウワダ村でのフィールドワーク、そして古代エジプト語研究への回帰について述べる。

### アッレ語研究の現在

私が調査対象としているアッレ語は、アフロアジア語族クシ語派東クシ語群に属するデュライ諸言語の一つだ。話者の分布する主な地域は南部諸民族州アッレ自治区で、中心地はコンソのバスターミナルからジンカの方角へ約 40km 進んだところに位置するガウワダ村 (/gáwwáda/) と呼ばれている。アッレ自治区自体の歴史は浅く、元々はコンソ特別自治区とデラシェ特別自治区の境界に暮らしていたアッレ族の居住地が 2011 年 1 月頃に独立した自治区 (woreda) として承認されたばかりの新しい行政地区だ。それまでは民族名が定まっておらず、村の名前で呼ばれることが常だった。伝承によると彼らは現在のアッレ自治区

北部の高地地方に最初の集落であるアウガーロ村 (/ʔawkáro/) を形成したらしく、彼らの言葉で「高地」を意味するアッレ (/ʕále/) を民族名として採用したという。現在アッレ自治区にはアウガーロとガウワダを含めて 17 の村があるが、これに加えて、エチオピア暦 2008 年（西暦 2015 年頃）中の完成を目標に、ウォランゴ村 (/wollánko/) という新たな中心地となる村の建設が進んでいる。現地にいるアッレ族の友人の情報によると、西暦 2015 年 8 月中に全ての行政事務所がウォランゴ村への移転を完了し、ウォランゴ村は既にアッレ自治区の正式な行政的中心地として機能しているようだ。

執筆時現在、私はまだ 5 回しかエチオピアを訪問していない「初心者」ではあるが、初回からガウワダ村で調査を行っている。調査協力者のほとんどが低地地方のガウワダ村出身だが、低地地方と高地地方の違いを見るため、高地地方にあたるラリチョ村 (/laliʕo/) の出身者にも協力を依頼している。現在、アジス・アベバ大学の大学院生 Getachew Gebru 氏と情報交換を行いながら、アッレ語文法の調査研究を進めている。特に Getachew 氏はアッレ語の名詞形態論を対象に研究を進めており、私が調査している動詞形態統語論と合わせて、語や文の構造に関する研究は着々と進んでいる。私は特に移動事象の類型論研究や、複数の動詞や節から構成される複雑な文について研究を進めており、第 13 回国際認知言語学会（ニューカッスル、イギリス）、第 22 回国際歴史言語学会（ナポリ、イタリア）、第 11 回言語類型論学会（ニューメキシコ、アメリカ）、第 8 回世界アフリカ言語学会議（京都）で研究成果の発表を行った。

アッレ語<sup>1</sup>の先行研究で最も全体的な記述は Amborn et al. (1980) だが、主な言語データは高地地方の村々で収集されており、低地方言の情報が欠けている部分もある。Tosco (2006, 2007, 2008, 2010a, b) はガウワダ方言の調査研究をしており、動詞形や情報構造など様々な側面の記述および分析を進めている。最近の研究論文としては Yoshino (2013a, 2013b, 2014, forthcoming) があり、アッレ語ガウワダ方言の動詞形態統語論について記述分析が進められている。

### ガウワダ村でのフィールドワーク

そもそも私がアッレ語を対象に選んだのは偶然であった。大学院入学後最初の夏、人生初のエチオピア訪問から遡ること半年前の 2011 年夏に、筑波大学で国際研究会を開催するにあたりアジス・アベバ大学から 2 名の研究者が招聘された。入学後に指導教員の池田教授からエチオピアでの調査に誘われ、二つ返事で快諾していたことから、その 2 名の研究者の東京都内でのアテンドを手伝った。その内の一人であった Wondwosen Tesfaye 教授が、これから私がエチオピアでの言語調査を始めるにあたって言語学的記述に乏しい言語のリストを提示してくださったのだ。それぞれの言語について簡単にだが文献調査をしたところ、前述の Tosco (2006) による「ガウワダ語」の記述を見つけ、先行研究ゼロから調査を始める難しさや地理的にアクセスが困難であるというようなリスクを避ける意味でもガウワダ村で「ガウワダ語」を調査することに決定したのだ。また 2011 年夏には東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所でアムハラ語の言語研修（主任講師：若狭基道氏）を受講した。これもまたこの年に開講されたのは偶然で、前回の研修は 1995 年、さらにその前は 1970 年だったようだ。

2012 年 2 月に初めてエチオピアを訪れ、最初の数日は高山病に悩まされながらアジス・アベバ大学で客員研究員登録の手続きやガウワダ村やアッレ語に関する情報収集を行った。幸いにもガウワダ村出身の大学生が卒業したばかりだったので、ガウワダ村で役人をしているという卒業生の Geniso Gesato 氏を紹介してもらうことができた。Geniso 氏は私と同年代だが、当時はアッレ自治区の観光・文化担当事務所の所長

1 Amborn et al. や Tosco の調査および出版時には、まだアッレ自治区が存在していなかったため、デュライ語 (Dullay) やガウワダ語 (Gawwada) のように呼称されている。

をしていた。アポイントメントを取ろうと電話をして研究について説明をすると、快く引き受けていただけることになった。一先ずコンソのバスターミナルで合流してからガウワダ村へ案内してもらうことを約束して、翌朝アルバ・ミンチ行き長距離バスのチケットを購入し、翌々日にはアルバ・ミンチへ到着した。道路舗装工事の影響か、アジス・アベバからアルバ・ミンチまで16時間近くかかってしまい、さらにアルバ・ミンチ全体が停電していたため、予定していたホテルを探すこともできず、バスターミナル付近の安宿で夜を明かした。朝が来るとすぐに宿を出て、コンソ行きのミニバスに乗り込み、満員になるまで1時間乗客待ち、そして4時間の旅程を経て、



写真1 Geniso氏(中央)、Niguse氏(右)、吉野(左) および当時の職員4名(後)のミーティング

、昼過ぎにコンソのバスターミナルへ到着した。Geniso氏と待ち合わせ場所の St. Mary Hotel で合流したが、その日は伝統的に牛や山羊などを屠殺する習慣のある土曜日で肉料理がメニューにあったので、シャクラ・ティブスを二人で頂いた。シャクラとは下部に燃料が置かれた小鍋状の調理器具で、揚げ焼きされた状態(ティブス)で提供された肉の塊をナイフで切り分けて香草入りのチリソースをつけて食べるのだ。当時はガウワダ村へのミニバスが平日の早朝と夕方にしかなかったもので、土日は村のことやアッレ語について情報を聞き出そうと Geniso 氏を質問攻めにしてしまった。その時に初めて、ガウワダ村を中心とする地域に暮らす民族の居住地としてアッレ自治区が独立していたことを聞き、また正式に「アッレ」という名前を民族・自治区・言語に使用することになったことをこの時に初めて知った。

ガウワダ村での生活は、最初こそ習慣の違いには戸惑いを感じたが、アジス・アベバやアルバ・ミンチのように人混みや忙しい様子もなく、蒸し暑かったり水不足になったりするコンソとも異なり、とても過ごし易かった。ただ初回は毎日コンソとの往復をしていたので、日中しか村に滞在できず、また週末や客が少ない日にはミニバスが出ないので困ったりもした。その後の調査では、Geniso氏と同じくガウワダ村出身でアジス・アベバ大学を卒業した Niguse Gusse 氏という別の公務員の自宅に寝泊まりさせてもらえるようになり、あまり時間に追われず調査をすることができるようになった。村での一日はだいたい決まっていて、7時半に山羊とニワトリの鳴き声で起床する。8時には「カフェ」で朝食のサモサや揚げパンを紅茶で頂き、9時過ぎ頃にアポイントメントのある方へ電話して所在を確認してから訪問して調査を開始。12時には村の友人や協力者に「レストラン」で昼食を奢りつつ親交を深め、午後にも協力してもらえる場合は14時過ぎに調査を再開。しかし街灯や屋内照明はほとんど無いので日が暮れる前に調査を終え、調査協力者がいない時間帯は収集データの整理をしたり他の協力者との約束を取り付けたりしている。

村での調査において、個人的に一番難しいと感じているのは、技術的なことではなく、謝礼の支払いだ。外国人はもとより研究者もあまりやって来ないこともあり、村人たちは良くも悪くも「研究協力」に慣れていなかった。そのため当初は謝礼を受け取ってもらえず、困惑してしまったことが多々あった。今でも積極的に現金で受け取ろうとしてくれないので、最近では代わりに祭で分け合う牛肉のための共同出資を申し出たり、日本やアジス・アベバから大量のお土産(お菓子など)を持ち込んだりすることで相当分を渡している。

今までのフィールドワークで一番の失敗だったのは、2014年9月の調査だろう。アジス・アベバの定宿にしている Baro Pension で出会った日本人旅行者3名がたまたまこれから南部を見て回るということで、ガ

ウワダ村にも遊びに来ることになった。ちょうどエチオピア暦の新年だったので、遙か遠くの先進国でトヨタの国「ジャパン」からやって来た客人3名のために村の友人たちが盛大な宴会を開いてくれた。(どうやら私は客ではなかったらしい。) 私自身もエチオピア新年は初めてだったので浮かれ過ぎてしまった。新年3日目に体調を崩し、4日目にはインフルエンザのような高熱と痛みに襲われる始末。ベッドから起き上がることもままならず、何とか村の診療所にバイクで送ってもらった。診療所に着くなり、マラリアの疑いがあるということで簡易検査を受けた。その結果、何と陽性反応が確認されたのだ。幸いにも持参していた治療薬マラロン(Malarone)の服用を直ぐさま始めたおかげで大事には至らなかった。帰路で寄ったアルバ・ミンチ病院とアジス・アベバの韓国系病院で受けた血液検査はどちらも陰性反応になっていた。ほとんど調査できずに貴重な研究費を浪費してしまったことは反省しなくてはならない。エチオピアで調査をしている言語学者の知り合いでマラリアに罹患した方がいなかったため過剰に反応してしまったようにも思うが、無事に帰国できたのはガウワダ村の友人たちの献身のお陰でもある。いくら感謝しても彼らの好意に報いることはできないが、言語調査を通じてアッレ族への貢献をこれからも続けていきたい。また、リスク管理について深く考えさせられる経験でもあった。



写真2 新年の宴を主催して下さったレストラン経営者の Kusse Wechefo 氏(右)と、友人の Ephrem Teshome 氏(左)

### 古代エジプト語研究への回帰

古代エジプト語とアッレ語に直接的な繋がり認められないが、究極的には祖語を共有すると考えられる言語として対比することは重要だろう。アッレ語の動詞非完結形の活用は、エチオピア周辺地域で話されている他のアフロアジア語族の言語とは異なり二人称や女性の動詞接尾辞に /t/ が含まれておらず、アッレ語の形容動詞 (adjective verb) の活用と類似している。アッレ語の研究を進める上で他のアフロアジア諸言語の文献調査も並行して行っているが、その中で特に東クシ諸言語の副動詞や形容動詞が他の動詞形・動詞クラスとは異なる振る舞いをする事が多々あると分かった。その異なる振る舞いの一つに属格主語という現象をあげることができる。古代エジプト語の(共時的に)基本的な動詞活用は所有格代名詞と同じ形態素によって人称活用しており、属格主語の一例であると考えられるのだ。Banti (2001: 17-18) も東クシ諸言語に見られる形容動詞活用が、所有格代名詞を起源とする形態素を用いているという分析をしている。古代エジプト語の基本的な動詞活用の起源は形容動詞の活用を本来の正しい解釈とは異なる解釈によって動詞の活用として誤用され続けた結果である可能性がある。また、副詞的および名詞的な動詞の用法が存在することも形容動詞からの品詞転換であると考えられる余地がある。それだけでなく、この古代エジプト語の動詞活用は一方では共時的に状況節の述語になりうるため副動詞との機能的類似があり、また他方では通時的には分詞が動詞語基であるという仮説が一世紀の間ずっと完全に否定されることなく残っている。今後のアッレ語研究では、私の研究の原点である古代エジプト語を振り返りつつ、他の語派の言語における様相との比較・対照も行っていくつもりだ。

## おわりに

古代エジプトと現代エチオピアは数千年の時間と数千キロメートルの距離で隔たれているものの、歴史を振り返ればエチオピア正教は古代エジプト神話と融合したキリスト教コプト教会の流れを汲んでおり、文化的には強い繋がりが存在する。その繋がりが言語と直接的に関係しているとは考えられないが、研究対象が古代エジプトから現代エチオピアへと辿り着いたのが単なる偶然の連続ではなく、私の運命であったと考える方が好奇心とロマンを掻き立てられる。

## 参考文献

- Amborn, Hermann, Gunter Minker & Hans-Jürgen Sasse (1980) *Das Dullay: Materialien zu einer ostkuschitischen Sprachgruppe*. Berlin: Dietrich Reimer.
- Banti, Giorgio (2001) New perspectives on the Cushitic verbal system. *Proceedings of Berkeley Linguistics Society* 27S: 1-48.
- Tosco, Mauro (2006) The Ideophones in Gawwada. In: Siegbert Uhlig (ed.) *Proceedings of the XVth international conference of Ethiopian studies*, 885-892. Wiesbaden: Harrassowitz.
- Tosco, Mauro (2007) Gawwada morphology. In: Alan S. Kaye (ed.) *Morphologies of Asia and Africa*, volume 1, 505-528. Winona Lake, Indiana: Eisenbrauns.
- Tosco, Mauro (2008) Between coordination and subordination in Gawwada. In: Zygmunt Frajzyngier and Erin Shay (eds.) *Interaction of Morphology and Syntax: Case studies in Afroasiatic*, 207-226. Amsterdam: John Benjamins.
- Tosco, Mauro (2010a) Semelfactive verbs, plurative nouns: on number in Gawwada (Cushitic). In: Frederick Mario Fales and Giulia Francesca Grassi (eds.) *Proceedings of the 13th Italian Meeting of Afro-Asiatic Linguistics*, 385-399. Padova: S.A.R.G.O.N. Editrice e Libreria.
- Tosco, Mauro (2010b) Why contrast matters: information structure in Gawwada (East Cushitic). In: Ines Fiedler and Anne Schwarz (eds.) *The Expression of Information Structure*, 315-347. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins.
- Yoshino, Hiroshi (2013a) Preliminary survey on ‘Alle verbal system. *Studies in Ethiopian Languages* 2: 82-95. Yamaguchi: The Japan Association for Ethiopian Linguistics.
- Yoshino, Hiroshi (2013b) An observation on the connection of Alle verbal clauses. *Tsukuba Working Papers in Linguistics* 32: 69-79. Ibaraki: University of Tsukuba.
- Yoshino, Hiroshi (2014) Event integration patterns in ‘Alle. *Studies in Ethiopian Languages* 3: 96-121. Yamaguchi: Japan Association for Ethiopian Linguistics.
- Yoshino, Hiroshi (forthcoming) Event integration and the consecutive construction in ‘Ale. *Asian and African Languages and Linguistics* 10. Tokyo: Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa, Tokyo University of Foreign Studies.

(よしの・ひろし／筑波大学大学院人文社会科学研究科)

# 言語類型論の研究の魅力と英語教育における有用性 ～私の研究の経験から～

河内 一博

---

私の研究の中心は、類型的な観点からエチオピア中南部で話されているシダーマ (Sidaama) 語 (ハイランド・イースト・クシ語派) とウガンダ北部で話されているクプサビニィ (Kupsapiny) 語 (南ナイル語

派)の文法構造の記述をし、これらの言語のデータを使って理論的問題(特に、形態統語論と意味論・語用論の言語類型論的な問題)に取り組むことである。研究はより多くの研究者の目に留まるものであるべきだと思うので、発表には多くの場合英語を使っている。教育に関しては、本務校の防衛大学校で教えているのは主に英語と言語学・英語学の初歩だが、これまで非常勤で東京外国語大学と東京大学大学院で言語学(特に類型論)を教えている。防衛大のすべての授業と非常勤の一部の授業で、英語のみを使っている。以下では、初めにシダーマ語の例を挙げて言語類型論の魅力について紹介し(クプサビニ語については別の機会にしたい)、次いで言語類型論の研究が英語教育に有益であるということを論じ、最後にこれらの発見と考へに至った私のこれまでの研究の経緯、近年の研究、今後の展望について述べる。

### 言語類型論の研究の面白さとシダーマ語(と周辺言語)に関する発見

言語類型論は、言語は文法的な特徴によってどのようなタイプに分類できるか、どの言語にも見られる普遍的な特徴、あるいは多くの言語に見られる特徴は何か、違った文法的な特徴の間に関係はあるかといった問題を扱う。今までに記述されたすべての言語のデータをもとにしているため、既に文献にあるデータが前提となる。言語類型的な観点から研究が過去にあまりなされていない言語を調べていて面白いのは、今までに当然と考えられていた言語に関しての前提(例えば、以下で述べる「名詞句の主要部は名詞か限定詞である」という前提)を覆すような現象や、先行研究で提示されている仮説(例:例えば、以下で述べる「FEELを表す語彙は世界のどの言語にも存在する」という仮説)の反証になるような現象が見つかることがあるということである。例えば、シダーマ語(と周辺言語)に関して以下のような例がある。

- FEELを表す語彙は世界のどの言語にも存在するという仮説がある。これは、意味的最小単位である概念は語彙としてすべての言語に存在し、より複雑な概念はそれらの基本的な語彙の組み合わせによって説明できるという理論(Wierzbicka 1972, 1999, Goddard & Wierzbicka 2002 など)の基盤になっている。しかし、感情や感覚を表すのに状態変化動詞(英語の例:sicken)を使うシダーマ語にはFEELを表すどんな品詞の語彙も存在しない(Kawachi 2007)。
- アフリカの言語の類似性を地理的特徴によるものとみなし、ある数以上の文法的特徴と語彙的特徴の存在によってアフリカという言語地域を提案する仮説(Heine & Leyew 2008)がある。しかし、シダーマ語(およびいくつかのエチオピアの言語)にはその特徴の多くが欠如している(Kawachi 2011a)。
- 名詞句(英語の例:the spicy food)の主要部は名詞(the spicy foodの場合、food)(Chomsky 1970)あるいは限定詞(the spicy foodの場合、the)であることを前提にしている理論があるが、この問題は議論の対象になっている(例:Muysken 1982, Zwicky 1985, Hudson 1987)。名詞を使わずに名詞句を形成するのに使われるシダーマ語の接語(clitic)(音韻的には他の語に依存しているが、統語的には独立している形態素)の用法を見ても、名詞句に主要部という概念は必要ではないという仮説(Dryer 2004)が最も良く支持できる(Kawachi 2011b)。
- 修飾というのは通常統語的な概念である(Stowell 1981, Rubin 1994)が、シダーマ語での名詞句における修飾という概念は、多くの場合、普通名詞に連体修飾句・節(形容詞句、数詞句、指示詞句、属格の名詞句、関係節)が伴うという統語的な概念だけでなく所有人称接尾辞が付くという形態的な概念も含まれる。普通名詞が統語的または形態的に修飾されているかどうかによって、格の接尾辞の異形態の違いなどの8つの文法的区別が成されている。(Kawachi & Tekleselassie 2012)
- シダーマ語には所有物の名詞句の外部で所有者が表される所有構文が二つあり、これらの構文の使用は、従来の研究(例:Chappell & McGregor 1996, Payne & Barshi 1999)でこのタイプの構文に関して言われているように所有物の譲渡不可能性(inalienability)というよりも、二つの名詞句の指示物の所有関係の

予測可能性によって決まってくる (Kawachi 2012)。

- ・ 所有物の名詞句の外部で所有者が与格で表される構文はヨーロッパの地域にしか存在せず、標準的ヨーロッパ諸語 (Standard Average European languages) の地域的特徴であると言われている (König & Haspelmath 1998, Haspelmath 1999)。しかし、その構文はシダーマ語にも存在する (Kawachi 2013)。
- ・ より自然な移動のイベントは形態統語的によりタイトな結合を示す構文で表されるという仮説 (Croft et al. 2010) がある。しかし、シダーマ語の話者が様々なタイプの移動のビデオのシーンを描写したデータでは、走っているシーンやスキップしているシーンの方が歩いているシーンよりも、結合がよりタイトな構文が結合がよりルースな構文に比べて頻繁に使われた (Kawachi 2015)。
- ・ シダーマ語を含む北東アフリカの多くの言語 (特に、東クシ、西オモ、東ナイル、南ナイル) は、地域的特徴として、目的語が無標で主語が形態的に有標である有標主格言語 (Dixon 1994, König 2006) であると記述されている (Tucker 1966, Hudson 1976)。しかし、シダーマ語には当てはまらない。この言語は対格型言語であり、超分節接辞 (最後の母音のセグメントに起こる高いピッチ・アクセント) により対格・斜格を標示しているため対格・斜格は有標だが、この点が見落とされて記述されている (Kawachi in press)。

このように、研究が進んでいない言語を調査していると今までに記述されている言語に基づいた理論や仮説の反証となるような現象が見つかることがある。他方で、系統的・地理的に遠い言語に類似した現象が見つかることがあるということも、研究があまりなされていない言語の言語類型論的研究の魅力である。シダーマ語を研究していて特に面白いと思ったのは、日本語といくつかのアジアの言語に特有と言われる現象のいくつかは、シダーマ語にも存在するという点である (他のエチオピアの言語にも見られる特徴であるかもしれない)。例えば、日本語には不明瞭な表現 (例:「卵を 10 個くらいください」)、省略表現 (例: 願望の意味で「彼女が来たら」)、スル型というよりもナル型表現 (例:「合計は 300 円 / ブルになります」) が特徴的に存在すると言われるが、シダーマ語にも存在する (河内 2012a, 2013a, b)。さらに、前半部はそれだけで完結した文として成立するような節なのだが、後半部は名詞と述部の標識から成っている人魚構文 (例:「... が ... する予定だ」) は、アジアの地域の言語だけに見られる特徴であると言われていた (角田 1996) のだが、明らかな例は二つのタイプだけとはいえ、この構文はシダーマ語にも存在する (河内 2012b, 2013c)。「... が ... する様子だ / ようだ」に相当する構文であり、名詞 *gara*「様子、方法」または接語 *=gede*「よう (に)」を使い、最後に述部の標識が来る。シダーマ語の人魚構文はアジアの地域の言語とは違った歴史的発展をしてきたようであるが、他の言語の人魚構文のように、人魚構文が表す意味は「証拠性 (evidentiality)」「話し手がどのように発話内容についての情報を得たか」に関するものであることが多いという点と、人魚構文の述部の名詞が文法的な標識に発展するという文法化の過程を示しているという点は、シダーマ語にも当てはまる。

日本では日英対照研究が盛んだが、日本語 (と東洋の言語) と英語 (と西洋の言語) を両極に置くことを前提に比較すると、どうしても言語学の理論や仮説の構築のもとになっている後者から前者を見てしまい、前者は普通ではないもの、あるいは不可解あるいは神秘的なものとしてとらえられがちである。他の地域の言語を考慮に入れることにより、もっと客観的言語を分析することができる。

### 言語類型論の研究の英語教育への貢献

大学レベルの英語教育においては様々な学問的背景の研究者が教職について効果を上げている。言語学、英語学、英語教育、英米文学だけでなく、英語に関わる地域の歴史学や社会学等の専門家がそれぞれの得

意な点を活かしながら、英語教育をより効果的なものに行っていると思う。現在のところ言語学の中でも言語類型論の研究者が英語教育に携わっていることは多くないのだが、この学問分野の観点を英語教育に導入することによって、これまではなかった効果が見られる可能性があるということを以下で指摘したい。

実際私も職場で言われるが、英語の教員が英語以外の言語の研究をしていると、他の専門分野の人や研究者ではない人に「英語の教員なのに何でそんな言語を研究しているの？」と言われるかもしれない。「…語学」をやっている、語法研究のために専らデータを収集していると誤解される場合もある。しかし、英語以外の言語に取り組んでいる言語類型論の研究者は、世界の言語の文法構造を比較し、どのような違ったパターンを示すか、共通点は何か、そしてその相違点と共通点をもたらす要因は何かを知りたいため、研究がなされていない言語のデータが必要なのである。当然英語も興味関心であり、暗黙のうちに研究対象の一部になっている。そのような研究者は、英語の教員として少なくとも以下の点で英語教育に貢献でき、これらの長所を活かして効果的な英語教育を実践することができると思う。

第一に、言語の類型的比較対照は2つだけの言語を知っているのではできないのであり、より多くの言語の構造を知っていなければならない。日本人学習者が英語のある現象を難しいと感じるのは、英語が構造的に日本語と違うからというのが原因であることがあるかもしれないが、通言語的に見て普通でない現象であるというのが原因であることもある。これを見いだすには類型的な視点が必要である。特に英語をもとにした言語理論は英語偏重になる恐れがあり、そのような理論に基づいた英語教育は危険である。例えば英語のWH疑問文の形成のし方は通言語的にまれであり、多くの言語で疑問詞は疑問の対象になっている構成素が平叙文において現れる位置に起こる (Van Valin 1998) のだから、英語をもとにして考え出したWHの移動の規則 (Chomsky 1977) は一般原則ではないし、これをもとにして英語のWH疑問文の統語構造を教えるべきではない。

第二に、言語の普遍性を前提にして英語と少数の言語を中心に構築された言語理論では抽象的な専門用語を使って研究が行われるのに対し、個別言語の特殊性を考慮に入れた言語類型論では伝統的な文法で使われるような用語を使って研究が行われるので、言語類型論の研究は英語教育における実用性がある。大学レベルでの英語教育には文法構造の説明が伴うが、日本語との対照、あるいは世界の言語との対照によって学習者の好奇心を引き出し、さらに帰納的、より客観的、かつ正確に英語の文法現象をとらえることができ、そのような分析に基づいて説明をすることができるのは、どの分野の専門家よりも言語類型論の専門家であると思う。

さらには、特に研究が進んでいない言語のデータを使った言語類型論の研究者は、研究に関するコミュニケーションに (論文発表、学会発表、専門分野の議論に、場合によってはフィールドでのデータ収集に、フィールドでの生活で生き残るため) 多くの場合英語を使っている。これは特に、言語類型論の成果を公表するにあたり聴衆・読者は、日本語の話者に限られることはなく、世界中の様々な言語背景を持ち英語に熟達している人々であるからである。このような状況は、現代における地球規模的な英語使用の典型例の一つであり、それを日常的に経験している英語の教員は、学習者に極めて重要な英語観を提供することができるし、特に英語のみを使った英語の授業が求められている今日の英語教育に大きな貢献をすることができる。

また、フィールドワークによる研究をしている言語類型論の研究者は、授業において、フィールドで自ら実際に経験したことに基づいて具体的な面白い話をするすることができる。自分の研究内容に関する言語間の比較等のみならず、社会文化的な話題まで、学生が興味を持つような広い範囲の話題をカバーできるので、専門課程においてだけでなく一般教養としての語学においても、研究内容およびフィールドでの経験を授業に直結させることができる。これは、専門課程で専門的な話題そのものを扱うのでない限り、背景

となる知識のない学生には高度過ぎて理解が難しい他の分野とは大きく異なる。

したがって、少なくともこれらの点において、言語類型論の研究者は、英語の教員として大いに実力を発揮できる。言語類型論はすべての言語が対象なので、対象の一つとして英語について知っているのは当然である。

### 私のこれまでの研究の経緯、近年の研究、今後の展望

慶應義塾高等学校を卒業後、慶應義塾大学の文学部に進みたかったが、祖父の代から商売を営んでいた父に反対され、商学部に進んだ。慶應義塾が最も重視する「実学」である商学部での学問の多くは、直感的で科学的でない分野に思えたため、関心を持つことができなかったが、高校と大学1, 2年で一生分遊んでしまったので、大学3年で英語の教諭になるために勉強することに決め、英語の教職課程に加わり、自由科目で取った文学部の英語関係の科目、特に言語学に夢中になった。3年時に商学部の履修科目の半分以上の成績が不合格であったため、4年時に時間割が全て埋まってしまう、バブルの時代に就職活動を行うことができなかった。何とか商学部を卒業し教職免許を取得することができたが、言語学をもっと深く勉強したいと思い、文学部に学士入学し、唐須教光先生から人類学的言語学の指導を受けた。

2つ目の学士を取得後、英語の教諭として慶應の附属高校の一つに就職した。5年半勤務した後、サバティカルをもらい1997年夏に妻とアメリカに渡り、ニューヨーク州立大学バッファロー校の言語学科に大学院生として入学した。この学校を選んだのは、反生成文法の問題と、研究が進んでいない言語のデータ重視の理論研究の伝統があるためである。特に、言語だけでなく言語と他の認知システムとの関係を解明しようとする Leonard Talmy 先生の様々な言語の文法構造のデータを基にした認知意味論と、語順を初めとしていくつもの言語現象に関して世界で最も多くの言語のデータを持っている Matthew Dryer 先生の定説を覆すような類型論に魅力を感じた。1年半くらいの計画で修士を取って帰国したいと思っていたが、それは不可能で、言語学に夢中になってしまっていた私は、理想的な職場での、職業としても申し分のない高校教諭の仕事辞めてバッファローで研究を続けることにした。

バッファローの大学院では、修士論文、博士課程進学資格論文、博士論文は違った分野のトピックについて書かなければならず、さらには最初の2つはジャーナルに出版できる質のものでなければならなかった。何よりも、英語で言語学の論文を書く方法を身に付けるのに苦労した。起承転結のスタイルが身に付いていた私は、言語学は理論的でなければならず、論文において、まず結論を述べ、先行研究で話題になっている理論的問題を扱い、その問題に関して提示された仮説を、自分が持っているデータを示して検証し、その検証結果の説明をするというパターンを取らなければならないということを理解し、自ら実践できるようになるのに最も時間がかかった。初めのうちは、興味深い言語現象について指導教授に話をしに行っても、どのような方向で論文を書いて行けば良いかについて余り助言はもらえなかったが、ある程度理論的問題を自分で発見できるようになってから、学会のアブストラクトを書いたものを指導教授のところに持って行って、一緒に長時間座って議論の進め方について一字一句書き方を手取り足取り教えてもらった。これが一番勉強になったと思っている。

論文のトピックの選定には相当時間がかかってしまった。修士論文は、Robert Van Valin 先生の Role and Reference Grammar の研究グループにいたので、この理論的枠組みで日本語について書こうと思っていた。しかし、特定の理論的枠組みで論文を書くとその枠組みをテストして多少の修正をするというスタイルを取ることに陥り易く、これは避けたかった。そこで、迷った挙げ句、まったく別の分野である心理言語学を選び、練習の有無による日本語の言い間違いのパターンの違いについて Jeri Jaeger 先生に指導を受けて書いた。結局修士を終えるのに入学から4年かかった。博士課程への進学資格論文では、話者の文法性の

判断の違いが現れ易いと言われる韓国語の配置動詞の意味について、母語話者からデータを採って、書いた（これらの論文はそれぞれ後に、*Journal of Psycholinguistic Research* と *Lingua* に出版した）。

バッファローでは色々な言語の話者を見つけることができるので、博士論文では、Talmy 先生の指導のもと、できるだけ多くの言語の空間移動の経路の表し方の比較をすることを考えていた。実際、日本語、韓国語、アムハラ語、シダーマ語、フランス語、スペイン語、ルーマニア語、英語、ロシア語、ハンガリー語、シェルパ語、ティグリニア語のデータを母語話者から採った（最後の3言語は、フィールド・メソッドの授業を履修し、授業外にもデータを採った）。忙しい Talmy 先生から少しでも助言を受けるために、アシスタントをし、彼の自宅と大学の間の車で送り迎えもよくした（大雪が降っていても高速を運転しながらノートを取る技術が身に付いた）。しかし、一言語の文法構造を理解するのにすらかなりの時間を要し、思うようには進まなかった。正に泥沼にはまってしまっていた 2005 年 1 月 21 日に Talmy 先生から突然その学期末に定年退職することを告げられ、博士論文のトピックは大きく変更せざるを得なくなった。（結局 Talmy 先生は Co-advisor になってくれたが、）Matthew Dryer 先生の指導で、言語学科と同じ建物にいた教育学の大学院生だったシダーマ語の母語話者 Abebayehu Aemero Tekleselassie 氏（現在 George Washington University の associate professor）からそれまで 3 年余りの間（空間移動の経路の研究のためだけでなく、Ph.D. 取得後の研究のために）こつこつとためていたシダーマ語のデータをさらに集め、この言語の文法を書くことにした。バッファローでは他の多くのアメリカの言語学の大学院と同様、ほとんど 20 年生というような人もいたのだが、その頃突然制度が変わり、「大学院に在籍できるのは 7 年まで、それを越える場合は毎年嘆願書を書いて認められた場合のみ更新して最長でも 10 年」という規則ができてしまい、無我夢中で博士論文に取り組んだ。

結局 2007 年 6 月に Ph.D. を取って、妻とバッファローで生まれた二人の子供とともに 10 年ぶりに帰国した。ほぼ 30 歳代すべてをアメリカで過ごしたことになる。アメリカの Ph.D. があれば簡単に就職できると思っていたのだが、帰国後仕事がまったくなく、アカデミアにいるのをあきらめかけて言語学への最後の投資のつもりで 2008 年 2 月にアメリカの学会に、3 月にエチオピアにフィールドワークに行った。しかし運良くその年 4 月に明治学院大学の非常勤講師、7 月に AA 研の非常勤研究員、10 月に防衛大学の教官の仕事を得た。

帰国後すぐは国内の言語学の研究者で余り知っている人がいなかったが、学会等を通して知り合いが増えた。2008 年から国内外の共同研究プロジェクトへの参加の誘いを受け、これまでに以下の方々のプロジェクトに関わっている：梶茂樹、角田太作、稗田乃、松本曜、渡辺己、Jürgen Bohnemeyer, Tom Güldemann, Prashant Pardeshi。2012～2014 年度には AA 研のプロジェクト「アフリカ諸語のイベントの統合のパターンに関する研究」の主査を務めた。このプロジェクトでは、アフリカのすべての大語族を網羅し、個々の言語が、空間移動、状態変化、アスペクト（相：言語で表される時間の内部構造）などのイベントにおいて、これらのイベントの要素を統合して形態統語的に表す方法を研究した。言語がより略図的なイベントの意味要素（例：空間移動の場合、経路）とそうでないイベントの意味要素（例：空間移動の場合、様態や原因）を統合して、どのように形態統語的に表すかに基づいた Talmy (1991, 2000) の類型論によると、最も略図的なイベントの要素を表すのが主動詞か動詞付随要素（接辞や不変化詞）かによって言語は大きく 2 つのタイプに分かれ、この違いは空間移動と他の 4 つの意味領域で見られるという。アフリカの多くの言語は主動詞で表すタイプに分けられると言われていたが、このプロジェクトを通して、全てのイベントの領域において一貫して同じパターンを示す言語は一つもなく、動詞の連続を使うが動詞付随要素で表す言語、分類が困難な言語、経路のタイプ等の要因により違った構文を使う言語があることがわかった。さらに、扱ったアフリカの言語はすべて、構文のタイプの違いはあるものの、イベントの概念要素を

起こった時間の順に並べる構文を、イベント要素に原因を含むイベントを基本的なものとして、様々な意味領域に適用しているということを発見した。これを根拠に、イベントの概念要素の統合をとらえるにあたり、ヨーロッパの言語のようにどのタイプの概念要素がどのような種類の文法範疇により表現されるかという次元に加えて、特定のタイプの概念要素がどのような順序で表現されるかという次元も考慮に入れる必要があるということをも主張した。このプロジェクトの成果は、2つの国際学会での共同発表 (Kawachi et al. 2015a, 2015b)、別の国際学会 (8th World Congress of African Linguistics) での7発表から成るワークショップ *Event Integration Patterns in African Languages* の企画、AA 研の『アジア・アフリカの言語と言語学』の特集号としての英語の論文集の出版 (2016 年春に予定) という形で公開している。最近気がついたことだが、このプロジェクトは、当初 Talmy 先生のもとで博士論文としてやろうと思っていたトピックを空間移動以外の意味領域にも拡大して、アフリカの言語に焦点を当てたものであり、共同研究であるからこそできたことである。まだデータがある言語の数が少ないので、プロジェクトの期間は終わってしまったが、インパクトの度合いの大きいジャーナルに共同発表できるようにデータを提供できる人にさらに声をかけて、非公式に共同研究を続けている。

フィールドワークに関しては、2008 年 3 月の後は 2008 年度の AA 研の研究補助金によりエチオピアに行った。2009 年度以降は科研によってエチオピアとウガンダで毎年合計 3 ヶ月程度調査を行っている。2009～2013 年度のクプサビニ語の調査はナイロティックの研究を勧めてくださった稗田乃先生の科研によるもので、それ以外は自分の科研による。

シダーマ語のコンサルタントは、Abebayehu 氏の従兄に紹介してもらったシダーマ・ゾーン東部 Bansa の Gudura 家の兄弟 (特に Legesse, Iyasu, Hailu) である。クプサビニ語に関しては、稗田先生に紹介していただいたマケレレ大学の Merit Ronald Kabugo 氏に前もって私が興味のあるいくつかのナイロティックの言語の一つのコンサルタントを探して欲しいと伝えたところ、私が初めてカンパラに着いた夜にたまたまカンパラに来ていたクプサビニ語の話者 Twoyem Kenneth 氏を連れて来てくれて、意気投合し、翌日クプサビニ語が話されているセベイに連れて行ってもらった。滞在中コンサルタントとして色々な人を紹介してもらったが、私が最も適任と判断した Chebet Francis 氏に、現在までメインのコンサルタントをしてもらっている。

私のコンサルタントたちは、長時間座って調査に協力ができるので、フィールドでは一日に 8～10 時間はデータを採る。研究以外にすることがないので、研究に専念できるのだが、とにかく時間がない。フィールドに行けなくなったらデータを使った研究が困難になるので、勤務先でフィールドに行く許可がもらえるように、そして科研等のグラントをもらい続けることができるよう、危機感を持って取り組んでいる。

これまで言語学の研究で一貫して心がけているのは、流行の理論や枠組みに流されることなく、時代を超えてより多くの研究者に参照してもらおうような研究をするということである。言語学者はもちろん個別言語の専門家として深い知識を持っている必要はあるとはいえ、言語学の研究は「... 語学」とは違う。言語学の論文執筆が一番難しいことであるが、扱うべき理論



写真 1 2009 年 3 月エチオピアのシダーマ・ゾーン東部のバンサにて：シダーマ語の民話のデータを提供した Bune と子供たちと

的問題と仮説は何なのかを明らかにして、体系的にデータを提示しないと、個別言語について書いたものを読んでもらえるということはありません。研究に使う言語は主に英語ということになる。

最後になるが、私の調査に長時間付き合ってくれるコンサルタントたち、フィールドワークを可能にしてくれる科研等の研究補助金、そして私の研究に理解を示してくれている職場と家族には、感謝の気持ちを持っている。どんなに時間を使っても次から次へと挑むべき問題が生じてくる言語学という分野はやりがいがあると思う。今後も主にこれら2つの言語のデータを使って類型論的な言語学の研究に取り組んでいきたいと思う。



写真2 2011年8月ウガンダ東部のエルゴン山麓のカブチオーワにて：クプサビニ語の民話のデータを提供した Cheeliimo たちと

#### 参考文献

- Chappell, Hilary, and William McGregor (eds.) (1996) *The Grammar of Inalienability*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Chomsky, Noam (1970) Remarks on nominalization. In Jacobs, Roderick A., and Peter S. Rosenbaum (eds.) *Reading in English Transformational Grammar*, 184-221. Waltham, MA: Ginn.
- Chomsky, Noam (1977) On wh-movement. In Culicover, Peter W., Thomas Wasow, and Adrian Akmajian (eds.) *Formal Syntax*, 71-132. New York: Academic Press.
- Croft, William, Jóhanna Barðdal, Willem B. Hollmann, Violeta Sotirova, and Chiaki Taoka (2010) Revising Talmy's typological classification of complex event constructions. In Boas, Hans C. (eds.) *Contrastive Studies in Construction Grammar*, 201-235. John Benjamins, Amsterdam.
- Dixon, Robert M. W. (1994) *Ergativity*. Cambridge University Press.
- Dryer, Matthew S. (2004) Noun phrases without nouns. *Functions of Language* 11: 43-76.
- Goddard, Cliff, and Anna Wierzbicka (2002) *Meaning and Universal Grammar (2 volumes)*. Amsterdam: John Benjamins.
- Haspelmath, Martin (1999) External possession in a European areal perspective. In Payne, Doris L., and Immanuel Barshi (eds.) *External Possession*, 109-135. Philadelphia: John Benjamins.
- Heine, Bernd and Zelealem Leyew (2008) Is Africa a linguistic area? In Heine, Bernd, and Derek Nurse. (eds.) *A Linguistic Geography of Africa*, 15-35. Cambridge University Press.
- Hudson, Grover (1976) Highland East Cushitic. In Bender, Lionel M. (ed.) *The Non-Semitic Languages of Ethiopia*, 232-277. East Lansing, MI: African Studies Center, Michigan State University.
- Hudson, Richard (1984) *Word Grammar*. Oxford: Basil Blackwell.
- Hudson, Richard (1987) Zwicky on heads. *Journal of Linguistics* 23: 109-32.
- Kawachi, Kazuhiro (2007) Feelings in Sidaama. *LACUS Forum* 33 (2006), 307-316.
- Kawachi, Kazuhiro (2011a) Can Ethiopian languages be considered languages in the African linguistic area? The case of Highland East Cushitic, particularly Sidaama and Kambaata. In Hieda, Osamu, Christa König, and Hiroshi Nakagawa (eds.) *Geographical Typology and Linguistic Areas – with Special Reference to Africa*, 91-107. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.
- Kawachi, Kazuhiro (2011b) Noun phrases without nouns in Sidaama (Sidamo). In Sutcliffe, Patricia (ed.) *LACUS Forum* 36 (2009), 25-35.

- Kawachi, Kazuhiro (2012) External possessor constructions in Sidaama. *Proceedings of the 45th Annual Meeting of the Chicago Linguistic Society (2009[2006]), Volume 1: The Main Session*, 319-333.
- Kawachi, Kazuhiro (2013) Dative external possessor constructions in Sidaama. *Proceedings of the 33rd Annual Meeting of the Berkeley Linguistics Society (2007), General Session*, 258-269.
- Kawachi, Kazuhiro (2015) Do speakers select constructions depending on the naturalness of described complex motion events? Presented at the *13th International Cognitive Linguistics Conference* at Northumbria University, Newcastle, England, on July 24, 2015.
- Kawachi, Kazuhiro (in press) Is Sidaama (Sidamo) a marked-nominative language? *LACUS Forum* 37 (2010).
- 河内一博 (2012a) 「日本語と Sidaama 語 (エチオピア) の共通点 [1]: 不明瞭な表現」『TEACHING ENGLISH NOW, Vol. 23, Around the World』表紙裏. 三省堂. [http://tb.sanseido.co.jp/english/newcrown/pdf/ten023/TEN\\_vol23\\_00.pdf](http://tb.sanseido.co.jp/english/newcrown/pdf/ten023/TEN_vol23_00.pdf)
- 河内一博 (2012b) 「日本語に特有と言われる現象はアフリカにもある: シダーマ語 (エチオピア) の場合」国立国語研究所 第 5 回 NINJAL フォーラム『日本語新発見 — 世界から見た日本語 —』於一橋記念講堂 (2012 年 3 月 24 日) (講演の報告書 pp. 37-45. 国立国語研究所 2013 年) <http://www.ninjal.ac.jp/publication/ninjal-f/pdf/ninjalF005.pdf>
- 河内一博 (2013a) 「日本語と Sidaama 語 (エチオピア) の共通点 [2]: 省略表現」『TEACHING ENGLISH NOW, Vol. 24, Around the World』表紙裏. 三省堂. [http://tb.sanseido.co.jp/english/newcrown/pdf/ten024/TEN\\_vol24\\_00.pdf](http://tb.sanseido.co.jp/english/newcrown/pdf/ten024/TEN_vol24_00.pdf)
- 河内一博 (2013b) 「日本語と Sidaama 語 (エチオピア) の共通点 [3]: 「ナル型」言語の表現」『TEACHING ENGLISH NOW, Vol. 25, Around the World』表紙裏. 三省堂. [http://tb.sanseido.co.jp/english/newcrown/pdf/ten025/TEN\\_vol25\\_00.pdf](http://tb.sanseido.co.jp/english/newcrown/pdf/ten025/TEN_vol25_00.pdf)
- 河内一博 (2013c) 「日本語と Sidaama 語 (エチオピア) の共通点 [4]: 人魚構文」『TEACHING ENGLISH NOW, Vol. 26, Around the World』表紙裏. 三省堂. [http://tb.sanseido.co.jp/english/newcrown/pdf/ten026/TEN\\_vol26\\_00.pdf](http://tb.sanseido.co.jp/english/newcrown/pdf/ten026/TEN_vol26_00.pdf)
- Kawachi, Kazuhiro, Yuko Abe, Osamu Hieda, Kyoko Koga, Junko Komori, Nobuko Yoneda, and Hiroshi Yoshino (2015a) Motion expression patterns in African languages. *NINJAL International Symposium: Typology and Cognition in Motion Event Descriptions*. 於国立国語研究所 (2015 年 2 月 25 日)
- Kawachi, Kazuhiro, Yuko Abe, Osamu Hieda, Kyoko Koga, Junko Komori, Nobuko Yoneda, and Hiroshi Yoshino (2015b) How African languages fit in Talmy's typology of event integration. *13th International Cognitive Linguistics Conference* at Northumbria University, Newcastle, England. (2015 年 7 月 24 日)
- Kawachi, Kazuhiro, and Abebayehu Aemero Tekleselassie (2012) Modification within a noun phrase in Sidaama (Sidamo). *Proceedings of the 34th Annual Meeting of the Berkeley Linguistics Society (2008), General Session*, 187-198.
- König, Christa (2006) Marked nominative in Africa. *Studies in Language* 30(4): 655-732.
- König, Ekkehard, and Martin Haspelmath (1998) Les constructions à possesseur externe dans les langues d'Europe. In Feuillet, Jack (ed.) *Actance et Valence dans les langues de l'Europe*, 525-606. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Muysken, Pieter (1982) Parametrizing the notion 'head'. *Journal of Linguistic Research* 2: 57-75.
- Payne, Doris L., and Immanuel Barshi (eds.) (1999) *External Possession*. Philadelphia: John Benjamins.
- Rubin, Edward J. (1994) Modification: a Syntactic Analysis and its Consequences. Ph.D. dissertation. Cornell University.
- Stowell, Timothy Angus (1981) Origins of Phrase Structure. Ph.D. dissertation. Massachusetts Institute of Technology.
- Talmy, Leonard (1991) Path to realization: a typology of event conflation. *Proceedings of the 17th Annual Meeting of the Berkeley Linguistics Society*, 480-519.
- Talmy, Leonard (2000) *Toward a Cognitive Semantics, Volume II: Typology and Process in Concept Structuring*. Cambridge, MA: MIT Press.
- 角田太作 (1996) 「体言締め文」鈴木泰・角田太作 編『日本語文法の諸問題: 高橋太郎先生古稀記念論文集』pp. 139-161. ひつじ書房.
- Tucker, Archibald Norman (1966) The Cushitic languages. In Tucker, Archibald Norman and Margaret Arminel Bryan (eds.) *Linguistic Analysis: the Non-Bantu Languages of North-Eastern Africa*, 495-555. Oxford University Press.
- Van Valin Jr., Robert D. (1998) The acquisition of WH-questions and the mechanisms of language acquisition. In Tomasello, Michael (ed.) *The New Psychology of Language: Cognitive and Functional Approaches to Language Structure*, 221-249. Mahwah, NJ: Erlbaum.
- Wierzbicka, Anna (1972) *Semantic Primitives*. Frankfurt: Athenäum.
- Wierzbicka, Anna (1999) *Emotions across Languages and Cultures: Diversity and Universals*. New York: Cambridge University Press.

Zwicky, Arnold M. (1985) Heads. *Journal of Linguistics*, 21: 1-29.

(かわち・かずひろ／防衛大学校)

## 北東アフリカで話されるナイル・サハラ言語ファイラムに 属する言語

稗田 乃

### アフリカ大陸 4 言語ファイラムの 1 つ～系統研究の「ごみ箱」～

親縁関係をもつ（1 つの祖語から由来する）と考えられる諸言語が、ナイル川源流域から西アフリカにかけて話されている。この言語グループは、ナイル・サハラ言語ファイラムと呼ばれている。言語ファイラムという名称は、語族（たとえばインド・ヨーロッパ語族）より大きな集団で、しかも親縁関係が語族ほど明確に証明されない諸言語の集まりに用いられる。

ナイル・サハラ言語ファイラムは、アフリカ大陸で話される言語のうち、アフレイジアン言語ファイラム（アフレイジアン言語ファイラムの親縁関係は、近年、証明されつつあり、言語ファイラムから語族と呼んでもよい研究状況になっている）、ニジェール・コンゴ言語ファイラム、コイサン言語ファイラム（コイサン言語ファイラムは、最新の研究でその親縁関係が否定され、コイサン言語ファイラムの諸言語は、緊密な言語接触による共通性をもつ言語地域を形成していると考えられている）に所属する言語を差し引いた言語で構成されたという歴史をもっている。このことから分かるように、ナイル・サハラ言語ファイラムは、分類しがたい言語を集めた「ごみ箱」とも言え、その親縁関係の証明が困難な作業になるのは当然である。

ナイル・エチオピア学会の会員が関心のある北東アフリカ（暫定的にエジプト、旧スーダン、エチオピア、エリトリア、ソマリア、ジブチの地域とする）に、比較的多くのナイル・サハラ言語ファイラムの言語が話されている（ただし、ソマリアとジブチを除く）。ナイル・サハラ言語ファイラムの言語を現地調査し、研究した日本人は、おそらく筆者が最初であろう。ナイル・サハラ言語ファイラムに所属する言語の研究に携わっている他の日本人研究者は、この特集記事の書き手に加わっているのだから、日本におけるナイル・サハラ言語ファイラムの研究史は、この特集記事以前にさかのぼる必要はない。他の研究者がどのような研究をおこなっているかは、かれらの記事にまかせるとして、筆者は、自分の研究を紹介することにしよう。しかし、その前に与えられた宿題をすませしておく。

### 故福井勝義教授によるメエン語（スルマ言語群）を話す人々の認知科学研究

与えられた宿題は、言語学からみた故福井勝義教授の業績を紹介することである。その業績には、色彩の認識人類学的研究に関する多くの論文があるが、1 冊にまとめたものが東京大学出版会から公刊された認知科学選書 21『認識と文化、色と模様の民族誌』である。これは、故福井教授によるエチオピア西南部に住むメエン語を話す人々（民族名はボディ）の民族誌である。故福井教授が同様のテーマで南スーダ

ンのナーリム語を話す人々の調査をしたときに、筆者がかたわらで調査のありさまを観察したことがある。そのような理由でこの宿題が与えられたのであろう。筆者の感想は、「幼い子供たちに数百の微妙に異なる色彩カードを見せて、その分類を試みさせるのは無謀なこと」であったが、その印象はあとで覆ることになる。

今度、上記の書籍を読み直して学んだことをいくつか書いておこう。人類学では *cognition* を「認識」と翻訳しているが、*cognition* は、この書籍が認知科学選書におさめられているように、「認知」と翻訳されるのが認知科学においては一般的である。言語学は、*cognitive linguistics* を「認知言語学」と翻訳しているので、言語学（認知言語学）は、認知科学のなかの1つの学問領域をなしていると考えられる。

1950年代と1960年代にかけての人類学者による研究によって、色彩用語というものは言語によって大きな相違があることが分かった。これは、言語相対論的な見方を支持するものと考えられた。ブレント・バーリンとポール・ケイはこの相対主義の仮説にチャレンジする試みとして色彩のカテゴリー化は、焦点色が手掛かりとされていると主張した。焦点色は、異なる言語間でも高度の一致が見られることから、色彩のカテゴリー化は、言語の相違をこえた普遍的なものであると、かれらは結論づけた。福井教授によれば、ボディの焦点色は、いちがいに1つの焦点に収束するものではなく、複数の焦点に分散する。これは、「普遍性はかならずしも相対性と対立するものではなく」と慎重に結論をさけているが、バーリンとケイの普遍論にたいする反例である。言葉をかえれば、ボディの焦点色が他の民族の場合とちがって、収束点をもたないのは、焦点色が教育（社会化）の産物であることを示しているのである。書籍の後半で記述されるボディの色彩にまつわる文化（たとえば、牛の毛色の分類と管理）は、焦点色が社会化の産物であることを雄弁に語ることになる。バーリンとケイによる普遍性を探求する試みそのものは正しかったけれども、焦点色を探求の手段として取り上げたのは必ずしも正しくなかったことを、データは示していると考えられる。最後になったけれど、メエン語とナーリム語は、ともにナイル・サハラ言語ファイラムのなかの下位言語群を構成しているスルマ言語群に所属する言語である。

### スルマ言語群の言語特徴～死語の脅威にさらされている言語～

さて、北東アフリカ、エジプトにはヌビア語の方言以外はナイル・サハラ言語ファイラムの言語は話されていない。エリトリアで話されている言語でナイル・サハラ言語ファイラムに所属するのはクナマ語とナラ語だけである。したがって、北東アフリカでナイル・サハラ言語ファイラムに所属する言語が主に話されている地域は、エチオピアと旧スーダンである。

筆者がエチオピアで調査したナイル・サハラ言語ファイラムに所属する言語は、西南部で話されているコエグ語とオモ・ムルレ語である。これらの言語は、ナイル・サハラ言語ファイラムのなかの下位言語群であるスルマ言語群に所属している。コエグ語は、おおよそ300人の第1言語（人が最初に習得する言語を言う。普通、人の言語能力は、第1言語がいちばん高い。）話者をもつ。オモ・ムルレ語は、調査時、すでに「死語の脅威」にさらされており、8人の話し手が存在すると言われたが、筆者は、そのうちの3人を確認した。話し手は、現在、さらに減少していると考えられる。コエグ語の話し手は、さとうきび農場の計画のため、筆者が調査した地域から立ち退きさせられた。政府の統計では民族としてのコエグは、移り住んだ地域で増加している。しかし、コエグ語を話すことのできる者が現在どれほど存在するかは明らかではない。コエグ語の将来は、けっして明るいとは言えない。

コエグ語は、他のスルマ言語群の言語とは構造がかなり異なっている。おそらく、近隣で話されている言語、ニャンガトム語（ナイル諸語）、ムルシ語（スルマ言語群）、カロ語（アフレイジアン言語ファイラム）との頻繁な言語接触により言語変化を起こしていると考えられる。しかも、複雑な民族間関係は、コ

エグ語の語彙体系を複雑なものにしている。たとえば、ある時期はカロ語を話す人々と同盟し、ある時期はカロ語を話す人々との同盟を解消しムルシ語を話す人々と、また別の時期はニャンガトム語を話す人々と同盟する。このような複雑な民族間関係から、コエグ語の語彙体系は、農業に関する多くの語彙が農業を主要な生業とするカロの人々が話すカロ語からの借用語で構成されており、牧畜に関する語彙が牧畜を生業の中心と考えるニャンガトムの人々の話すニャンガトム語からの借用語で構成されている。

高度に発達した多言語状況は、語彙体系の豊かさをもたらしたが、その一方で形態論に単純化をもたらした。たとえば、他のスルマ言語群の言語は、名詞の複数形をつくる様々な形式をもっているのにたいして、コエグ語は、名詞の複数形をつくるやり方は、わずかな不規則名詞を除いて、ただ1つの規則的なつくり方（現代英語の複数形 -s/ -es のような）に変えてしまった。ただし、形容詞や指示詞の複数形は、いまだに比較的豊かな形態論をしめしている。コエグ語は、指示詞や形容詞が名詞を修飾する場合（日常会話において名詞が単独で用いられる頻度は多くない。日常では、「この本は面白い」とか、「よい本を読みなさい」というように、名詞は、たいいてい、指示詞「これ」とか形容詞「よい」などを伴うだろう。）、修飾語を含む名詞句のどこかに複数性を表示するだけでよい。普通、指示詞か形容詞を複数形にして、名詞そのものは単数形を用いる。だから、指示詞や形容詞が豊かな形態論を保持し、名詞の複数をつくり方は単純なものになったと考えるべき。残念ながら、コエグ語の統語論は、十分に調査されていない。簡単な文法記述があるだけである。現在、オックスフォード大学出版からエチオピアの言語を紹介する書籍（1976年にオックスフォード大学出版からベンダー、ボウエン、クーパー、ファーガソンによる編集の“Language in Ethiopia”が出版された。その改訂版にあたる）の編集が進められている。その中の1つの章がコエグ語の記述になる予定である。

オモ・ムルレ語については若干の語彙だけが知られている。それによると南スーダンで話されているムルレ語とよく似た言語であると考えられる。それ以外のことはこれからの調査をまたなければならない。ただ、オモ・ムルレ語に関しては興味あることが分かっている。オモ・ムルレ語の話し手が語るかれらの歴史から、かれらは、もともと南スーダンの現在ムルレ語が話されている地域に住んでいた。そこから移動を開始し、エチオピアとケニア国境近くでオモ川を渡って現在のエチオピア西南部に到った。南スーダに残ったムルレ語の話し手とのあいだで紛争が生じたために、オモ・ムルレ語の話し手は民族移動を行ったことが知られている。現在、オモ・ムルレ語の話し手は、ニャンガトム語を話す人々の中で1つのまとまった地域集団を形成している。オモ・ムルレ語の話し手のほとんどがニャンガトム語を第1言語として話す。それどころか、たいいてい話し手は、オモ・ムルレ語を話す能力を失っている。死語になる日も遠くないと思われる。

コエグ語とオモ・ムルレ語のほかに、メエン語やマジジャン語など多くのスルマ言語群の言語がエチオピアで話されている。これらスルマ言語群の言語のほかに、エチオピアには、様々なナイル・サハラ言語ファイラムに所属する言語が話されている。南スーダンでも話されているヌエル語やアヌア語は、ナイル語西方言に所属する。ニャンガトム語は、おそらくこれとよく似た言語であるトゥルカナ語とともにナイル語東方言に所属する。また、グムズ語、ベルタ語、コモ語などが話されている。ウドック語も忘れてはならないだろう。

### ナイル諸語の言語特徴～通言語的に興味ある言語現象～

ナイル・サハラ言語ファイラムに所属する言語が多く話されているのは、旧スーダンにおいてである。アチョリ語（筆者は、スーダンではなくウガンダで調査を行った）は、南スーダンにおいても話されるナイル語西方言に所属する言語である。アチョリ語を含む西ナイル方言のいくつかの言語は、ダブルダウンス

テップ声調と呼ぶ世界的に見ても珍しい声調をもっている。ダブルステップ声調は、実際の聞こえが低声調とおなじくらい、あるいは、それ以上に低く聞こえるのだけれど、構造的には高声調と同じ働きをする。ダブルステップ声調は、今はまだ世界の少数の言語にだけ見つかっているが、研究が進めば多くの言語でその存在が証明されるかもしれない。また、アチョリ語は、一見すると関係節の前後に関係詞をもつかと思える文をもっている。しかし、関係節の最後の位置にくる標識は、じつは指示詞「この」であり、関係節標識ではない。たとえば、日本語では「この昨日に買った本」とも、「昨日に買ったこの本」とも言えるように、指示詞が修飾する名詞のすぐそばの位置におかれることも、修飾する名詞から分離して関係節の先頭に置かれることも可能である。アチョリ語の場合は、指示詞を修飾する名詞のすぐそばの位置に置くことが許されない。つねに、関係節の最後の位置に置かれるのである。一方、関係節標識は、関係節の最初の位置に必ず置かれる。このために、関係節がその前と後の両方に標識によってはさまれるかのように見えるのである。

人が情報を他人に伝えるとき、その情報源が話し手自身か、あるいは、第3者かを表現する言語手段がどんな言語にも存在する。この言語手段をエヴィデンシャリティと呼んでいる。たとえば、日本語で、「昨日犬が吠えたのを聞いた」は、犬の吠えたのを聞いたのは話し手本人である。一方、「昨日犬が吠えた」と聞いた」は、犬が吠えたのを聞いたのは第3者であろう。話し手は、第3者から伝え聞いた事実を述べたのだらう。アチョリ語では、情報源が話し手本人であることを表現するには、補文標識（たとえば、英語の *I said that* における *that* に相当する）を用いない文を使用し、情報源が第3者であることを表現するには、補文標識を用いる文を使用する。「見る」という動詞は、話し手本人が知覚する以外はありえないので、補文標識を用いない文だけが許容される。「聞く」という動詞は、上記の日本語の例のように、話し手本人が知覚することも、第3者から「伝え聞く」こともありえるので、補文標識をもたない文と、補文標識をもつ文の両方が許容される。アチョリ語の「直接話法」は、補文標識をもたず、「間接話法」は補文標識をもつ。エヴィデンシャリティの区別による補文標識の有り無しから、「直接話法」と「間接話法」が生まれたのである。英語では、直接話法が補文標識のない文、たとえば、*I said, …*、また、間接話法が補文標識のある文、たとえば、*I said that …* という。英語の話法とアチョリ語の話法は、類似している。従来の研究では、アチョリ語を含むナイル語西方言に、「直接話法」と「間接話法」の区別がないとされてきたが、それはいままで補文標識の有り無しの区別を観察できなかつたためと思われる。

また南スーダンには、アチョリ語のほか、ディンカ語、シルク語など多くのナイル語西方言に所属する言語が話されている。また、様々な方言からなるロトゥホ語とバリ語は、ナイル語東方言に所属する。また、ナーリム語のほかにもテネット語やスリ語など多くのスルマ言語群の言語が話されている。方言からなるヌビア語、ザガワ語などのサハラ言語群に所属する言語、モル語・マディ語が所属する中央スーダン言語群の言語、ダジュ言語群の言語、コマ言語群の言語、フル語、マバ言語群に所属する言語、ニマン語など多くのナイル・サハラ言語ファイラムに所属する言語が旧スーダンで話されている。もし、ナイル・サハラ言語ファイラムに所属する言語が親縁関係をもつ1つの言語群であるなら、その故地は、旧スーダンのどこかにもとめられるだろう。筆者に与えられた紙面はもうすでに尽きている。ナイル・サハラ言語ファイラムに所属する言語の日本における研究の歴史が浅いことは、残念なことである。将来の研究に期待したい。

(ひえだ・おさむ／東京外国語大学)

# 「民族」になった「難民」とアラビア語クレオールの子方

仲尾 周一郎

2005年の包括的和平合意から今年で10年が経ったが、この僅かな期間に独立、急激な人口移動、そして新たな内戦の開始を経験した、南スーダンの激動の時代は終わりを見せない。南スーダンに関わる研究者の間でも、紛争後社会に関する研究は頓挫し、先の内戦時代と同様に難民研究が再び主要な研究テーマとなりつつある。

筆者自身も、2009年から2013年の間、南スーダンで話されるアラビア語クレオール、ジュバ・アラビア語の記述言語学的研究を行っていたが、現在は何らかの形で国外に移住した南スーダン人（ある種の難民を含む）を調査対象にしたり、歴史的研究に方向転換したりして対処を試みている。

そんな筆者のフィールドではあるが、ところで、難民は難民でも最初の南スーダン人難民は誰だったのか、ということあまり話題にならない。スーダンでは約60年前の1955年に第一次南北内戦が生じたのでそれが最初かということ、そういうわけでもない。さらに60年以上前、19世紀末の世界では、エジプトからタンザニアまで北東アフリカ各地に散っていった「スーダン難民」（当時実際こう表現された）とその処遇について議論が行われていた。

## 19世紀の南スーダン難民

時は1880年代、南スーダンのナイル川流域をムハンマド・アリー朝エジプト最南端の州（エクアトリア州）として統治していたのは、ドイツ系のエミン・パシャ（総督）であった。「エジプト軍」(jihādiyya)として徴用されていた彼の部下の多くは、バリ、ディンカ、マディ、マカラカ等の南スーダンの諸民族出身であったが、彼らはイスラーム化し、自民族語に加えてスーダン訛りのブロークンなアラビア語エジプト方言を軍隊共通語として話していたようである。当時、スーダンにおけるエジプト支配に対して反乱を展開していたマフディー勢力は徐々にエクアトリア州へも拡大し、エミンとその部下らは1885年にウガンダ方面への避難を始めた。エミンはその後、H・M・スタンリーら「救出隊」によって「救出」されることになるが、彼の部下らは結果的にアルバート湖畔（ウガンダ・コンゴ国境地域）に取り残され、数年の知られざる難民生活をそこで過ごすこととなった。

その後のエミンの元部下らは、マフディー側勢力と交戦したり、避難先で奴隷狩りをしたりしていた

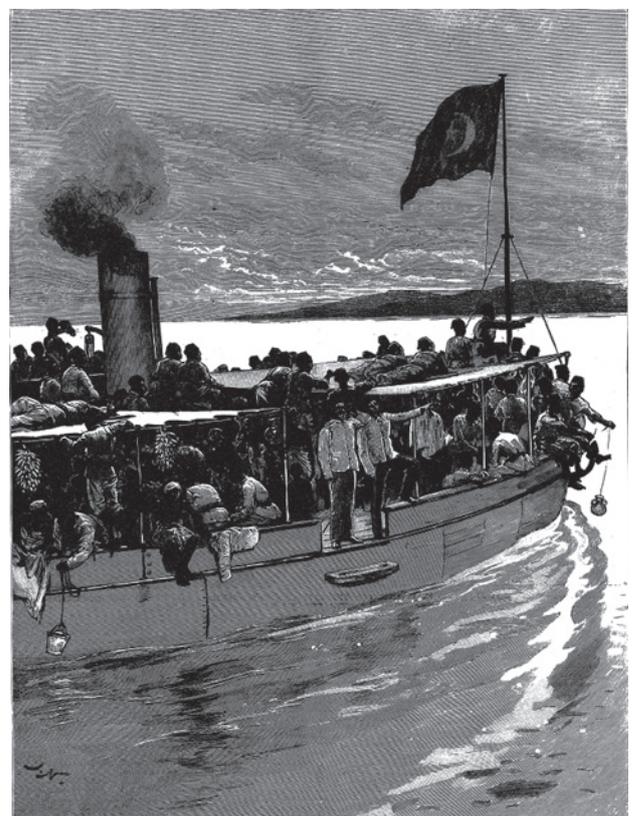


図1 難民化するエミンと部下たち  
(The Graphic, 30 April 1890)

ようだが、1891年に一つの転機が訪れる。ウガンダの保護領化にあたってイギリス人軍政官F・ルガード卿が、火器の使用に習熟した傭兵として、彼ら「スーダン難民」を植民地軍（*Uganda Rifles*、後に *King's African Rifles* へと再編）へと編入することを決めたのであった。同時期に、エミンの元部下の一部はコンゴ自由国軍（*Force Publique*）やドイツ領東アフリカ植民地軍（*Schutztruppe*）にも起用されていたように、19世紀末の「スーダン難民」は傭兵として人気があった。

## 東アフリカの「ヌビ人」と「ヌビ語」の創出

イギリス領東アフリカ植民地軍への編入後、「スーダン難民」は「スーダン人兵士」と呼ばれるようになったが、非公式には「ヌビ人」とも綽名されていた（恐らく前近代までのスワヒリ語で「スーダン人」を指した *Mnubi* に由来）。1910年代頃までヌビ人は第一次世界大戦での兵役や植民地化にあたって牧畜民等の平定などを担当していたが、1920年代に入るとヌビ人第一世代は退役しはじめ、植民地軍のリクルート元もヌビ人以外の東アフリカ領の土着の諸民族へと切り替わっていった。時を同じくして1920年代後半には、植民地文書に「(ウガンダ) 土着のコミュニティ」や植民地軍兵士の出身「部族」としての「ヌビ人」カテゴリーが現れはじめる（ただし、植民地行政官らはヌビ人が徐々に近隣の民族に同化することを期待していたので、暫定的なカテゴリーだったのだろう）。

ヌビ人という名称は百年以上経った現在でも使われている。ナイロビ郊外のキベラやカンパラの北の陸軍駐屯地ボンボを含むケニア・ウガンダの諸都市には、合計5万人以上のヌビ人が住むと言われる。残念ながら、ケニアでは土着の民族としては認められておらず、2009年のケニア国勢調査でも「その他のアフリカ人」と分類され、今なお国民IDの取得が困難な状況が続いている。なお、キベラはケニア独立以降急激な人口流入により世界最大規模のスラムと化しているが、かつてはヌビ人退役軍人と家族が住む閑静な「森」であったらしい（ヌビ語で *kibira* 「森」、元はニョロ語やガンダ語からの借用）。

世紀の変わり目に話を戻すと、当時のイギリス人軍人や医師らが残した言語記録などから、遅くとも1890年代後半には、「ヌビ人」らは単に「ブロークンなアラビア語」ではなく、確立した独自の言語体系を発展させていたことがわかる。言語学上の慣習として、こういった「不完全な片言の言語（ピジン）」から発展したような言語は「クレオール」と呼ばれるので、ヌビ語は「アラビア語クレオール」と呼ぶことができる。

ヌビ語は現在でもヌビ人らによって話されているが、近年、特にケニアでは20代以下のヌビ人はスワヒリ語を母語としつつある。消滅の危機に瀕した少数民族の言語に関する研究は昨今の言語学にとって重要なテーマだが、ヌビ人は少数民族であるだけでなく、元々が「クレオール」という奇妙な背景を持ち、ホームランドも持たない古くからの都市民であって、そういう彼らの「民族語」がスワヒリ語などの大言語に抗って生き残るのはさらに困難なことだろう。筆者はタンザニア・ダルエスサラームでもヌビ人家族に話を伺う機会があったが、70代の方でもヌビ語は話すことができず、スーダン料理の名前などがわずかに記憶されているのみであった。

ではヌビ語は言語死に瀕しているかという点、話はそう単純でもない。ヌビ語は一定数の非ヌビ人に



写真1 現存するキベラ最古の建物とヌビ人  
(2014年8月)

よっても第二言語として話され、発展してきた歴史も持つのである。20世紀初頭以降の東アフリカ内陸部（特に西ケニアや西ナイル／ウガンダ北西部）において、ヌビ人は、植民地軍内での接触や退役後の地域コミュニティでの社会的役割などを通じて、イスラームの伝道を行った主要なアクターであった。ヌビ人の語るところによると、米44代大統領バラック・オバマ氏の父方親族の一部をイスラームに入信させたのは彼らの祖先のヌビ人であり、「オバマ大統領のルオ人親族にヌビ語を話す人が何人も居る」というのが少々自慢らしい。

逆に黒歴史化しているのはウガンダ第3代大統領イディ・アミンの頃の記憶である。彼や、西ナイル地域出身の彼の側近らは、1970年代の政治学者・人類学者らによる議論の中で「ヌビ人」と同一視されることが多かった。しかし、昨今のヌビ人論者は、「彼らはヌビ人の中で生活することでヌビ語を習得し、イスラームを受け入れたが、かの「スーダン難民」の子孫にあたるわけではない」ことを強調する節がある。現在も西ナイルのムスリム・コミュニティではヌビ語が共通語として機能しているようであるが、その実態は今後の調査が必要である。

### 南スーダンの「ジュバ・アラビア語」

最後に、先に触れた南スーダンで話されるジュバ・アラビア語に話を戻したい。ジュバ・アラビア語は、「南スーダンで非ムスリムによって広域共通語として話されるアラビア語ピジン／クレオール」という説明がなされることが多く、ムスリムにより狭い範囲で話されるヌビ語とは随分印象が異なる。第一、ジュバ・アラビア語は、都市部やディアスポラ・コミュニティ内でモノリンガルが継続的に増加傾向にあり、若者の間ではスラングやことば遊びが発達しているなど、ヌビ語とは活きが段違いである。

ところで、筆者は約5年に亘って調査する中で、ある程度ジュバ・アラビア語に習熟していたが、2014年に初めて3週間ほどヌビ語を調査したのちラジオ・ウガンダのヌビ語番組に出演した際、視聴者から「ヌビ語のイントネーションが完璧で、日本人だとは信じ難い。一度顔を見せに来い！」という好評を得た。つまり、ヌビ語とジュバ・アラビア語はせいぜい短期間で矯正できる程度の違いしかないのである。これほど両言語が類似しているのは、もちろん歴史的背景による。

20世紀初頭に話を戻すと、現在のジュバのすぐ北東の町、ゴンドコロにはヌビ人で構成されたウガンダ植民地軍最北端の駐屯地があった。1914年のスーダン・ウガンダ国境線調整後も、退役後のヌビ人はスーダン領内にそのまま留まったが、1920年代末に新州都としてジュバの建設が始まると彼らは労働力として雇用され、新都に定住することを公式に許可された。こうした元ヌビ人の末裔は、今もジュバなどの都市のマラキアと呼ばれる地区に住んでおり、ヌビ文化を継承している。

植民地期にはジュバへの人口流入は抑制されていたが、2度のスーダン内戦期には避難民の流入とともにその人口は激増し、ジュバは小さいながら南スーダンが誇る国際都市へと変貌を遂げていった。現在、新来の都市民には、マラキアというと「自民族の言語も文化も失った根無し草の住処」くらいに見る人も少なからず居るが。しかし、ジュバの古地図を紐解くと、マラキアが下町の核となりそれを取り巻くように徐々に町が拡大したことが見て取れる。町の歴史的記憶は、今や忘却の危機にある。

筆者は、脱植民地化の過程でジュバなどの南スーダン都市において生じた人口移動の活発化（都市人口の増加と流動化）は、ジュバ・アラビア語が（ヌビ語と差別化される形で）「広域共通語」としての独自の性格を獲得するに至った言語史と深く関わったであろうと想像している。いつの日かジュバを再訪して、このような忘れ去られた都市史と言語史をリンクさせるようなフィールド調査をすることを夢見つつ、今暫くは周辺からこのトピックを掘り下げていきたい。

（なかお・しゅういちろう／日本学術振興会、京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科）

## 衝撃的なフィールドワーカー ～中野暁雄先生の御研究と思い出～

若狭 基道

中野暁雄先生に初めてお会いしたのは、私が大学4年生の時であった。大学の先生とは思えない風貌の人が教室の中に悠然と入って来たのだから衝撃的であった。これは同意見多数なので決して私の偏見ではあるまい。

先生はアフロアジア諸語が一通りお出来になり、この点でも衝撃的であった。チャド諸語には疎いと謙遜されていたが、先生の勤務先であった東京外国語大学 AA 研でハウサ語の研修が行われた際には受講生として一夏参加されていたというのだから、その熱心さには頭が下がる。

先生は、私が所属していた大学では非常勤講師としてアフロアジア諸語の比較文法の授業を担当されたが、東京外国語大学では古代エジプト語、コプト語、アッカド語、アラビア語諸方言、等々、多くの言語の授業をなさっていたし、私も随分参加させて戴いた。御退職後は Brockelman や Bergsträsser の古典的名著を講読する私的な勉強会に参加させて戴いた。該博な知識と片時も煙草を手放さない授業（晩年は禁煙されていたが）は衝撃的であった。

こうして見ると、先生は古い言語、文献に書かれた言語に通じていらっしゃる印象を持たれるかも知れない。それも事実であるが、先生は研究者としては寧ろフィールドワーカーとして本領を発揮されていた。アフロアジア系の言語が話されている場所の彼方此方で現地調査をなさっており、全部列挙するとこれもまた衝撃的なことになるのであるが、以下では本学会に関係がある地域のみに簡単に触れたい。

まず、比較的初期の御著作に 1976 年のソマリ語の語彙集、そして 1982 年のソマリ語の民話テキスト集がある。今や行くのが困難となってしまったソマリアで長期の調査をなされたのは羨ましい。尤も、エチオピアにもソマリ語話者は沢山いるのだから、彼等と接触しない私が怠慢なのだが。

同じく 1982 年にはティグレ語の語彙集を出版されているが、序文によると 1976 年から 1977 年にかけてのポートスーダンでの調査の成果である。

これまた同じ 1982 年には東京外国語大学 AA 研でアラビア語エジプト方言の言語研修を担当されているし、下エジプトの民話テキスト集を出版されているから、この前後の時期にはエジプトに集中されたのだと思われる。

筆者の手許に「アフロ・アジア語におけるオモ語（ゴファ語を中心に）」と題された手書きのハンドアウトがある。これは 1991 年に行われた研究会での先生の御発表に際してのものであるから、これ以前にエチオピアで現地調査をなさっていたことが分かるが、恐らく柘植洋一先生と一緒に行かれた時のものではないだろうか。この当時、私は未だ教養課程の学生だったので、このハンドアウトは後日私が同系統のウォライタ語の研究を始めた後に個人的に戴いたものである。先生の研究室は衝撃的な位に書籍が多く、御邪魔する度に本の雪崩を起こしては御迷惑をお掛けしていたが、先生御自身は何処に何があるかきちんと把握されていたに違いない、このハンドアウトを始め何時でも私の所望する文献や資料を即座に貸して下さった。

そして 1995 年には同じく AA 研でアムハラ語の研修を担当され、優れた教材を準備された。私が先生と

親しくさせて戴くようになったのはこの頃からである。既に自力でアムハラ語の勉強を進めていたこともあり、テキスト用に録音された音声資料とエチオピア文字による文字資料をパソコン上で合体させるようなアルバイトの仕事を下さった。これがどの様に活用されるのかは分からないままだったが、テキスト本文自体は非常に高度な内容であり、自分のアムハラ語能力の低さを反省すると同時に、AA 研の一室に籠っての作業であったため、何だか研究者になったかのような錯覚を覚えてもいた。時として飲みに来て行って下さった事は言うまでもない。

その10年後位に先生は再びエチオピアで現地調査をされるようになる。私も参加させて戴いていた柘植洋一先生、乾秀行先生を中心とする科研の研究協力者としてであった。その成果として、2006年にはティグリニヤ語の対話テキスト資料を、2008年には中央クシ系のアウンギ語の対話テキスト資料を部分的に公刊された。

悲しいことだが、これが中野先生の最後のフィールドワークであった。2009年には上記アウンギ語対話テキスト資料の続篇が未完の遺作として公刊された。

私もこの時期、頻繁にエチオピアに行っていたが、エチオピアで先生にお会いしたことは実はない（噂は色々伝わって来たが）。私は現地調査の場では日本人と積極的には関わって来なかったのだが、斯学のフィールドワーカーの草分けでいらっしゃった先生がどんな調査をなさっていたのか、拝見させて戴けば良かったと思わないでもない。ともあれ、先生が最後に調査なさった言語はアウンギ語であり、挙ってエチオピアの南部を目指すこの潮流の中、敢えて北方エチオピアのクシ系言語の研究の重要性に注目された先生は流石であり、アフロアジア諸言語に通じればこその他の追従を許さない眼力なのである。

以上の他、ジブチ及びその周辺のアファル・サホ語、エチオピアのオロモ（ガッラ）語も三省堂の『言語学大辞典』に寄稿された項目の内容から判断して一次資料を持っていらしたと思われる。私が見落としているものも多いであろう。

そしてこれら北東部アフリカ以外にもイスラエル、モロッコ、マルタ、ザンジバル、ジンバブエ、アラビア半島諸国、等々、本当に彼方此方に行かれたのだから衝撃的であると言わざるを得ない。

私は中野先生には日本でしかお会いしていない。そして頻繁にお会いして、酒席に御一緒させて戴いた印象がある。だが実際には、先生は日本にいらっしゃらないこともしょっちゅうだった。先生は教育熱心で、授業も沢山なさっていたが、調査という理由で長期間休講することも珍しくはなかった。海外に行くから、なぞと云う「くだらない」理由では休講しない＝日本に引き籠っていて調査に行かない先生と、中野先生のような先生との、どちらに教わるべきであろうか。私自身は中野先生に学べて俸せだったと断言出来る。これは私自身が研究者として成果を出せていないのとは全く別問題である。

だが、先生のような研究者・教育者は、今後は現れないであろう。今の大学を取り巻く風潮が続く限り、先生のような遣り方は許される筈もない。そう考えると何とも中野先生が羨ましい。

(わかさ・もとみち)